

# 甲南英文学

No. 22 泰 2007

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、\*印は編集委員長)

秋元孝文 \*西條隆雄 高橋勝忠 中谷健太郎 古瀬明里 和栗了

目次

*The Lost Girl*のヒロイン——イギリスとの訣別の意味——……横山 三鶴 1

*Billy Budd, Sailor* 再考

——“An Inside Narrative” に関する一考察……上野 未央 19

Sluicing における継承体系分析……根之木 朋貴 31



*The Lost Girl* のヒロイン  
——イギリスとの訣別の意味——

横山三鶴

SYNOPSIS

*The Lost Girl* (1920), one of Lawrence's least-read major novels, was written during Lawrence's most crucial period between 1912 and 1920, in which Lawrence expressed his bitter feelings against the problems of English society and its dehumanization through modernization. The novel is concerned with the changing image of women of that time, in which the fixed image of "the angel of the house" was deeply rooted. Alvina, the heroine of the novel, tries to break away from the bounds of convention and leaves her home and her country, England.

Alvina is a new heroine, who searches for her real self after having lost everything she belonged to. She needs to move out of England into a new place, into nature, with her Italian husband, Ciccio. Lawrence depicts her life as a reversal of the normal image of heroine which emphasizes growth. Crossing the national border suggests going out of her old self, which made much of her educated self and English society. Though Alvina may be lost in a conventional or moral way, she is a new woman who achieves her fulfillment by relying on "herself." Leaving England is the necessary step to recover her real self.

はじめに

1912年——この年はロレンスにとって最も激動の年、その後の人生を変えた年であった。ヘレン・コーク (Helen Corke) と別れ、ルイーザ・バロウズ (Louisa Burrows) との婚約も解消、3月にフリーダ (Frieda) と出会い、ジェシー・チェンバース (Jessie Chambers) とも別れて、5月にはフリーダと共にドイツへ渡った。8月、二人は徒歩でアルプスを越え、イタリアへ向かい、ガルダ湖畔のガルニャーノに落ち着き、そこで *Sons and Lovers* を書き終えた。母親との絆を断ち切れない息子の苦悩と葛藤——この作品の結末を自らの生に向かって歩き出す新たな

旅立ちというかたちで終えたロレンスには、次の作品として“Scargill Street”、バーズ (Burns) の作品の小説化、“The Sisters”、“Elsa Culverwell”の4作の構想があった。1912年12月23日付のサリー・ホプキン (Sallie Hopkin) 宛の手紙で、ロレンスは、次は愛の勝利についての作品を書くつもりである、「婦人参政権よりももっと女性のためになる仕事をする決意である」と述べている。<sup>1)</sup> その決意とは、ロレンスにとって、小説に新しいヒロインを登場させることであった。上記4作のうちの“The Sisters”は*The Rainbow*と*Women in Love*として15年、16年に完成、そして、“Elsa Culverwell”は、1913年“The Insurrection of Miss Houghton”となり、1920年最終的に*The Lost Girl*というタイトルで出版された。1914年に降イギリスに戻っていたロレンスが、再びイギリスを離れイタリアに向かったのは1919年、そのイタリアの地で、ロレンスはこの作品を完成させた。

本稿では、*The Lost Girl*のヒロイン、アルヴァイナ (Alvina) がなぜすべてを捨ててイギリスと訣別しなければならなかったのかということについて考察したい。ロレンスにとってのイギリスとイタリアはどのような意味を持ち、そして1912年から20年という年月は作品にどのような変化をもたらしたのだろうか。イギリスに始まりイタリアで終わる*The Lost Girl*は、その空間と時間の広がりがある作品を読み解くうえで、重要な鍵となる。

## 1. イギリスとイタリア

1912、13年の旅をもとに書かれた*Twilight in Italy*というエッセイには、ロレンスが当時イギリスとイタリアにどのような思いを抱いていたかを考えるヒントがある。たとえば、「レモン園」という章で、イギリスについて次のように語っている。

Yet what should become of the world? There was London and the industrial countries spreading like a blackness over all the world, horrible, in the end destructive. And the Garda was so lovely under the sky of sunshine, it was intolerable. For away, beyond, beyond all the snowy Alps, with the iridescence of eternal ice above them, was this England, black and foul and dry, with her soul worn down, almost worn away. And England was conquering the world with her machines and her horrible destruction of natural life. She was conquering the whole world.<sup>2)</sup>

「魂がすり切れてしまいそうな」イギリス。そのイギリスは自然生命を破壊する

ことで世界を征服し、ひいては世界全体を破壊するのだ。機械文明がそれをもたらしたといえるだろう。また、“On the Road”から“Return Journey”と改められたこの作品の最終章は、「帰路」とあるにもかかわらず、イギリス人である語り手(旅人)の帰る先はイギリスではなくイタリアである。そしてこの作品は次のように締めくくられている。

I dared not risk walking to Milan: I took a train. And there, in Milan, sitting in the Cathedral Square, on Saturday afternoon, drinking Bitter Campari and watching the swarm of Italian city-men drink and talk vivaciously, I saw that here the life was still vivid, here the process of disintegration was vigorous, and centred in a multiplicity of mechanical activities that engage the human mind as well as the body. But always there was the same purpose stinking in it all, the mechanizing, the perfect mechanizing of human life. (TI, 226)

この文章には、活気に充ちたイタリア人、生にあふれるイタリアの安堵感と、そこにすら機械文明が押し寄せているという不安は何えるが、基本的には、イギリスは機械文明を象徴し、イタリアは生命力、神秘を象徴するというヴィジョンが貫かれている。またロレンスにとって旅は北や東に向かうものではなく、南か西に向かうもの、つまり太陽の進む方向に向かうべきであり、それは、イギリスや北ヨーロッパに象徴される機械文明(=死)から離れ、よりプリミティブなもの(=生)そのものへ向かうということの意味していた。ロレンスにとってイタリアはまだ希望を抱ける土地であった。ここでは twilight は太陽が沈んでいくことではなく、太陽の進む先を見つめているということなのだ。その先に祖国イギリスはない。1912年の旅の頃から、ロレンスの気持ちは祖国から徐々に遠ざかり、*The Lost Girl* を完成した1920年という年は、ロレンスにとって、祖国イギリスとの訣別のあと、生涯遍歴ともいえるその後の人生への旅立ちの年となった。そしてロレンスと同じように、この小説のヒロイン、アルヴァイナもイギリスを離れ、彼女の場合はイタリア人の夫とともに、アルプスを越えてイタリアへ向かう。

So they turned to walk to the stern of the boat. And Alvina's heart suddenly contracted. She caught Ciccio's arm, as the boat rolled gently. For there behind, behind all the sunshine, was England. England, beyond the water, rising with ash-grey, corpse-grey cliffs, and streaks of snow on the downs above. England, like a long, ash-grey coffin slowly submerging. She watched it, fascinated and terrified. It

seemed to repudiate the sunshine, to remain unilluminated, long and ash-grey and dead, with streaks of snow like cerements. That was England! Her thoughts flew to Woodhouse, the grey center of it all. Home!

Her heart died within her. Never had she felt so utterly strange and far-off. Ciccio at her side was as nothing, as spell-bound she watched, away off, behind all the sunshine and the sea, the grey, snow-streaked substance of England slowly receding and sinking, submerging. She felt she could not believe it. It was like looking at something else. What? It was like a long, ash-grey coffin, winter, slowly submerging in the sea. England? <sup>3)</sup> (Underlined mine)

祖国を離れる彼女が目にしたのは、水中に沈みかけているイギリスであった。それは、「火葬の灰のような」「死人の灰色をした」「灰色の棺桶のように」「経帷子のように」「模糊とした長い灰色の生気のない」といったことばで描かれている。なぜ、彼女の目に映ったイギリスがそこまで死のイメージとして描かれなければならなかったのだろうか。当時のロレンスには、象徴的な解釈だけでは説明できないさまざまな出来事があった。

1912年7月、エドワード・ガーネット (Edward Garnett) に宛てた手紙の中で、フリーダとのイタリアへの徒歩旅行に出かける前に

“I loath the idea of England, and its enervation and misty miserable modernness. I *don't* want to go back to town and civilization. I want to rough it and scramble through, free, free. I don't want to be tied down.” (LI,427)

と述べている。当時はフリーダの夫が彼女との離婚に応じなかったため泥沼の状態にあったこともあり、ロレンスは自分がイギリス人であることを呪っているかのような表現をしている。小説についても満足のいく評価が得られなかった。その後、15年に出版された *The Rainbow* は、反社会性と猥褻性を理由に、出版差し押さえの処分を受けている。そして、第一次世界大戦が、ロレンスのイギリスとの関係をさらに複雑なものにしていくことになる。14年、イギリスに戻りフリーダとようやく正式な婚姻関係を結んだロレンスは、8月湖水地方を旅行中に開戦を知った。翌年、ロンドン郊外ハムステッドに滞在中、ドイツ軍の空襲を目の当たりにしたロレンスにとって、それは、戦争は単に恐怖と戦慄の体験ではなく世界を変えてしまうものだと感じさせる象徴的なできごとであった。その後、サセックス、コーンウォールへと移り住んだが、17年2月12日、シンシア・アスキ

ス (Cynthia Asquith) に宛てて

“You mustn't think I haven't cared about England. I have cared deeply and bitterly. But something is broken. There *is not* any England. One must look now for another world. This is only a tomb.”<sup>4)</sup>

と語っているように、ロレンスがいかにイギリスに絶望していたかが伺える。この年夫妻はアメリカ行きを考え旅券を申請したが、拒否された。申請には、祖国への忠誠宣言と兵役検査が不可欠とされていたが、肺に疾患があったことからロレンスは、すでに二度、徴兵検査を受けて不合格となっている。それだけでなくフリーダがドイツ人ということでスパイ容疑をかけられ、コーンウォールからも退去させられた。その後の生活は困窮し、ロレンスは三度目の徴兵検査も不合格となり、やがて終戦を迎える。苦境が続いたこの時期は、ロレンスにとっては、一個人としても、芸術家としても、国家や社会に対して厳しい感情を持たざるをえない状況に追い込まれていた。

ロレンスがサセックス州グレアムに滞在中に書かれた *England, My England* という作品がある。この作品は、家庭から孤立した男が自ら戦争に志願し命を落とすという物語だが、主人公のエグバート (Egbert) は小村と自由農民時代の古いイギリスを象徴する人物で、忘れ去られていた木造のコテッジに住み、農地を耕して暮らしている。しなやかな美しい肉体を持ち身のこなしも繊細で魅力的だが、著しく実務能力に欠けるため、生活は妻の父に支えてもらっている。そのうえ、自らの不注意で娘にけがをさせてしまい、父親としての責任を果たすこともできなくなってしまうのだ。しかし注目したいのは、時代に取り残され、世間から逃避し、家族からも孤立して破滅していったこの主人公に、ロレンスは古き良きイギリスへの憧憬を投影しているということだ。古き良きイギリスというのは、ここでは南部の農村に象徴される、産業革命以前のイギリスであり、人々が大地に根ざし自然と一体になって生命を感じて生きていた時代である。そして、現代という時代を生き抜くことができない主人公は、自ら戦争に赴きそこで死を受け入れるのである。*The Lost Girl* の沈んでいくイギリスの死のイメージと重ね合わせると、ロレンスは、当時のイギリスには生きる希望を見出すことはできなかったようだ。エグバートがイギリスで自分らしく生き抜くことができなかったように、アルヴァイナも、生きるためにはイギリス人としての自己を捨て、イギリスから姿を消すしかなかったのだ。

では、*The Lost Girl* の中で、ロレンスは、自らも訣別しなければならなかったイギリス社会をどのような角度から描こうとしたのだろうか。この小説の舞台の大半はイギリスであるように、問題はイギリスにある。アルヴァイナは、チッチョ (Ciccio) というイタリア人、教養もなく、人間としてというよりむしろ動物的な美しさを持つ旅の一座のダンサーに惹かれて、すべてを捨ててイタリアへ向かう。マイケル・ロス (Michael Ross) は、アルヴァイナは、“her Englishness” を生き抜くことができず、海外 (イタリア) への逃避生活 (“the life of exile”) を受け入れたのだとし、それは島国性と世界主義との内なる葛藤として注目に値すると述べている。<sup>5)</sup> 彼女は、イギリスから消え去ろうとはしてもエグバートのように死を選ぶことはなかった。自分自身を失うことなく、祖国とつながるアイデンティティを捨てる、つまり過去の自分を失いロスト・ガールとして生きることを選択した。その必然性はいったいどこにあるのだろうか。

## 2. アルヴァイナ誕生の背景

「母は、人生に失敗した。わたしは人生に成功するだろう。」という文章で始まる “Elsa Culverwell” は、1912 年に書かれた断片的な草稿であるが、この小説の主題を明確に示している。その草稿の内容は次のようなものである。

「わたし」の母は、人生に満たされない、プライドの高い、孤独な人であった。母が 32 歳のとき 21 歳の父と知り合う。父はパブリック・スクールで教育を受け、父親の遺産でノッティンガムロードに、あたりで一番大きな住宅付きの店舗を建てた。母の父親が亡くなったときわたしの父はその遺産を期待していたが、実際手に入ったのは少額で、しきりに悔しがった。4 歳上の姉が 6 歳になったときにガヴァネスが来て、それ以来、母は娘の教育も家のこともガヴァネスにゆだねてしまった。父は商売が下手で、家は次第に貧しくなっていった。ガヴァネスはさして多くのことを教えてはくれなかったが、わたしは少しの算数とフランス語、英語、音楽と絵、植物の勉強をした。姉は 16 歳で亡くなったが、先生はわたしのために家にいてくれた。そのころ給料は支払われていなかったのので、彼女は出稽古に出かけたり、子どもたちに音楽や絵を教えていた。家はどんどん貧しくなり、わたしが 20 歳になっても小遣いすら持っていなかったのので、先生はわたしに生徒を持つように勧められて、子どもを家に来させてレッスンをするようになった。先生が病気になってからは代わりに出稽古にも行くようになった・・・<sup>6)</sup>

満たされない母、家庭では存在感のない父、家と娘の教育をとりしきるガヴァ

ネスという構図は、そのまま *The Lost Girl* に取り入れられたが、大きな変化は語り手が一人称の「わたし」ではなくなったことである。かわってヒロイン、アルヴァイナが登場した。別の語り手を登場させることによって、「わたし」の視点だけでは描ききれなかったヴィクトリア朝時代の女性の抱える問題や女性観の変化が象徴的に描き出されることになる。——中流階級のレスペクタビリティ、産業社会で働く夫を支える理想の女性像としての「家庭の天使」、それに加えて社会問題ともなった「余った女」——このような社会の構図が、*The Lost Girl* では、そのままヒロイン、アルヴァイナの育った家庭、家庭教育に反映されている。

A calm year of plenty. But one chronic and dreary malady: that of the odd women. Why, in the name of all prosperity, should every class but the lowest in such a society hang overburdened with Dead Sea fruit of odd women, unmarried, unmarriageable women, called old maids. Why is it that every tradesman, every schoolmaster, every bank-manager, and every clergyman produces one, two, three or more old maids? Do the middle-classes, particularly the lower middle-classes, give birth to more girls than boys? Or do the lower middle-class men assiduously climb up or down, in marriage, thus leaving their true partners stranded? Or are middle-class women very squeamish in their choice of husbands? (1-2) (Underlined mine)

炭鉱で栄えた中部イングランドの町、その豊かな歳月の最後の年、1913年、結婚もせず、結婚もできない、余った女が溢れる状況を、ロレンスは「慢性的な病巣」と言い、悲劇であるとも述べている。“odd women” というのは、ギッシング(G. R. Gissing) の小説のタイトルへの言及であるが<sup>7)</sup>、実際、19世紀中頃以降、女性の人口が男性のそれをはるかに超えた。この男女数のアンバランスは、原因として、死亡率の相違、海外移住による両性間の相違、上流・中流階級男性の晩婚の傾向などが挙げられ、女性人口の増加によって結果として結婚できない「余った女」が世の中にあふれ、それが社会問題にもなっていた。以前は女性の理想といえば結婚、「家庭の天使」とは産業資本がその支配権確立の一環として制度化した「理想の女性」であり、このような規範としての女性像が時代の支配的イデオロギーとして掲げられていた。特に、中流階級の家庭では、妻は働かず、家庭の天使として良妻賢母であることがレスペクタビリティの象徴でもあった。アルヴァイナの父、ジェイムス (James) が妻にどれほど「家庭の天使」を期待したかは別として、彼は、マホガニー材でできた作りつけの家具を用意して、妻クラリス (Clariss)

を迎えた。しかし、実をいうと彼が期待したのは妻の持参金の方で、それが期待したほど得られなかったことに失望した彼は、娘ができるとすぐ妻をマホガニーの家具の寝室に残して自分は別の部屋に移り、経済活動に従事していくのだった。

家に取り残された彼女は、健康を害して「家庭の天使」としての役割を十分に果たすことができず、そこに登場したのがガヴァネスのミス・フロスト (Miss Frost) であった。ガヴァネスというのは、生計の資を得るために教師をして働く女性のごとであり、ガヴァネスの仕事は、中流階級の母親の仕事と類似していたので、プライドを失うことなくレスペクタビリティを共有しえた。一方、娘を持つ親たちにとっては、ガヴァネスを雇うことは、一家のお上品ぶりを証明する中流階級の経済力のシンボル (上流気取り) ともされた。ハフトン (Houghton) 家にあつては、クラリスが病気のため、フロスト先生はガヴァネスであると同時にアルヴァイナの母親の役割も果たすことになる。彼女が静かにハフトン家を支配していくのは時間の問題であった。フロスト先生は家庭の維持費を受け取っていなかったのだから、坑夫や商人の娘たちに音楽を教えながらハフトン家の家計を支え、アルヴァイナには、ピアノの理論と実践、水彩画、ラシーヌ (J. Racine) の詩の翻訳など、レディとしての教育を施した。こうして、アルヴァイナは学校教育を受けず、家庭でのガヴァネスの教育と、社会生活として日曜学校や聖歌隊、布教会の福祉活動に参加することで、ほっそりと上品で育ちのよい娘に成長した。

一方、アルヴァイナには元来「皮肉っぽい性質」(20) もあった。しかし、彼女が不自然に騒いだりすると、フロスト先生は、それは本来のアルヴァイナではないのだと教えこみ、教えられるままに彼女も、慎み深く洗練された娘として期待にこたえていたのであるが、やがてその関係が崩れるときがやってくる。23歳になったアルヴァイナは、母の診察にきていた医師の知り合いであるアレグザンダー・グレーム (Alexander Graham) と出会い、どこか原始的なところがあるグレームに魅力を感じたアルヴァイナは、彼と結婚してシドニーへ行く決心をした。ところが、フロスト先生はアルヴァイナの心を自分の方に引き戻そうと躍起になり、あの人はただ自分勝手に官能的なだけだからあなたはすぐに捨てられるに決まっている、と言ってアルヴァイナを説得した。アルヴァイナは思いとどまったが、このときフロスト先生は「あなたに影響を与えようとした自分がまちがっていた。」(26) と思い、アルヴァイナに影響力をもち続けてきた自分に初めて自信を失った。

フロスト先生が権威を失ったときから、アルヴァイナの反抗が始まった。反抗

というより、彼女は従順で可愛くしていることを辞めたのである。反抗的な性格を、本来の自分ではないと教えられ、これを表に出さないように躰られていたので、アルヴァイナが本来の自己を意識し始めるのも当然のことである。フロスト先生への信頼が崩れた今となつては、彼女と同じ道を辿るわけにはいかず、アルヴァイナは突然、看護婦になると言つて、周囲を驚かせた。『ランセット』(The Lancet) で 6 ヶ月で助産婦の資格が取れるという広告を見て、彼女は住み慣れた町を出て、イズリントンという町へ向かった。「育ちのよい娘が看護婦になるなんて」と父親が反対したように、看護婦は一般的には下流階級の仕事であると考えられていた。しかし、ナイチンゲールの活躍以来、看護婦という仕事が人気のある職業になってきていたのも事実で、準上流以上の者が費用を払って訓練を受ける制度もあり、中流以上の女性が一応体面を保てる職業にもなっていた。

アルヴァイナは、イズリントンではじめて同じ年代の仲間を得て、健康的にもなつていった。彼女の価値観を決定的に変えるきっかけは、看護婦としてスラムを担当した時のことである。お産に立ち会った彼女は、「産む」という機能だけを残り、最悪の状態のなかで無関心にその行為にだけ集中している、人間として最も原始に近い女性の姿を目の当たりにした。その経験が彼女の「お嬢さん育ち」を終わらせた。

Was Alvina her own real self all this time? The mighty question arises upon us, what is one's own real self? It certainly is not what we think we are and ought to be. Alvina had been bred to think of herself as a delicate, tender, chaste creature with unselfish inclinations and a pure, "high" mind. Well, so she was, in the more-or-less exhausted part of herself. But high-mindedness had really come to an end with James Houghton, had really reached the point, not only of pathetic, but of dry and anti-human, repulsive Quixotry. In Alvina high-mindedness was already stretched beyond the breaking point. Being a woman of some flexibility of temper, wrought through generations to a fine, pliant hardness, she flew back. She went right back on high-mindedness. Did she thereby betray it? (34)

アルヴァイナは、今まで自分のことを、「利己的ではなく、純粋で気高い心をもつた、繊細でやさしい、貞節な人間」だと思つて育てられてきたが、それがメダルの表であるとするなら、裏返してみると感情の従順さをもつた女性としての自分がいて、「メダルの表を返して裏を見たとしても、だからといってそれは表を

否定して裏を裏切ったことにはならない。」(34)ということに気づく。メダルの裏側は、今まで見つめることのなかったもう一つの、そして本来の自分の姿であった。

アルヴァイナの母、クラリスとフロスト先生の運命は似通っている。二人の不幸は、夫やだれかに幸せにしてもらうことを期待したことだ。クラリスは夫に裏切られ、悲しみのうちに病気になってゆっくり死に向かった。そんな彼女にフロスト先生は心を痛めるが、彼女自身はというと、結局だれも結婚してくれなかったから、自分も同じようにゆっくり死に向かうと思っている。二人とも、結婚に幻滅した時点で生きることをあきらめてしまった。「家庭の天使」という理想に縛られるあまり、限りなくそこに近づこうとして破滅した。そしてその失敗の原因は自分自身にあること、そもそも理想像自体が作られたイメージであることにすら気づいてはいなかったのだ。フロスト先生の場合、「家庭の天使」として生きる人生を期待しながら相手が現れず「余った女」となり、それでも理想像にしがみつき、ガヴァネスとして半ばその役割を果たして自己実現したつもりでいた。善意からではあるものの、結果としては時代遅れの教育をアルヴァイナに施すことで、かろうじて自分のレスpekタビリティを保とうとした。だが、レスpekタビリティの象徴であった「家」の中で、彼女たちは滅んでいった。

この二人の女性が続いて亡くなったのは象徴的である。アルヴァイナにとって抑圧、強制でしかなかった彼女たちの生き方は、完全に否定されたことになる。母が亡くなったとき「娘の問題は、彼女自身の運命と関係があるのであって、母の運命とは関係ない」(43)と語り手は言う。これは、先に述べた“Elsa Culverwell”の草稿の冒頭部分「母は人生に失敗した。わたしは人生に成功するだろう」という文章を思い出させる。母親の人生、その時代の生き方を否定して、娘が自分の新しい運命を生きようとするのは当然のことだ。そのために、ロレンスは「新しい女」を登場させなければならなかった。

### 3. 「新しい女」としてのアルヴァイナ

アルヴァイナの「新しい女」としての可能性は、どこにあるのか。1880年から90年代のイギリス小説に登場する「新しい女」は、結婚を自己実現の手段としない女性とも考えられていた。しかし、ロレンスのヒロインは結婚を通して「新しい女」のあり方を模索する。ヒラリー・シンプソン (Hilary Simpson) は、この作品には「女性の反抗から服従」という戦前から戦後にかけてのロレンスの関心の

移り変わりが投影されていて、結局、ロレンスにおける結婚のあり方には女性の服従や受動という面が強調されている、と述べる。<sup>8)</sup> 確かに、この作品はそのような批判の対象となってきたのだが、仮に結婚が女性の服従を意味するとしても、ロレンスにとって、それは単なる男性に対する女性の服従という次元のものではない。結婚という経験を通して得られる、より自然な、原始的な生命の根元に対する服従、自然や運命を受け入れる柔軟性を意味していたと思われる。

アルヴァイナが看護婦の訓練を受け始めてから、語り手は、運命は外の力と関係するものではなくて自身の性質によるものであり、「彼女自身の計り知れない性格が彼女の運命である」(67)と述べている。女性にとって、結婚よりもまず自分の人生をつくりあげることに失敗することが生きることに失敗するということであり、屈辱なのだ。彼女にとって看護婦という職業は、正面から人間の生そのものと向き合う点でも意味があった。アルヴァイナの父は、娘のために財産を作っているつもりであったが、実際には次々と事業に失敗し、亡くなったときは何も残っておらず、アルヴァイナは財産といえるものすべてを失ってしまった。と同時に、彼女は失ったものを取り戻す努力を放棄し、財産どころか自分の精神的立脚基盤まであえて捨てることを選択しようとする。そのために、ロレンスはチッチョのような人物、イギリス人ではなく、言葉に頼らず、肉体で語りかける動物のような美しさを持った男、闇のなかから突如として現れたかのような神秘性を持った男を作り出す必要があった。

“They like you to touch them.”

“Who?” His eyes kept hers. Curious how *dark* they seemed, with only a yellow ring of pupil. He was looking right into her, beyond her usual self, impersonal.

“The horses,” she said. She was afraid of his long, cat-like look. Yet she felt convinced of his ultimate good-nature. He seemed to her to be the only passionately good-natured she had never seen. She watched him vaguely, with strange vague trust, implicit belief in him. In him— in what? (140)

この作品の中で、チッチョはどの人物より象徴的に描かれている。彼はことばで自己を語るということがほとんどなく、具体的な人物像というものが浮かんでこない。当時、ロレンスと親交のあった作家、キャサリン・マンスフィールド(Katherine Mansfield)が、「ロレンスは人間なるものを否定している。想像力を否定している。……彼の描くヒーローやヒロインは人間ではなくうろつき回る動物

だ。……記憶に残るような言葉は一語もない。……精神の欠落の教義を主張している」<sup>9)</sup>とこの作品を酷評したが、これこそロレンスの意図したものと言えるのではないか。チッチョは、限りなくプリミティブに近い男として、より抽象化された存在であり、重要なのは、チッチョが一人の人間としてどのような人物なのかではなく、チッチョのような人物によって、つまり彼を媒体としてどのような変化がアルヴァイナに起こったかということなのだ。

アルヴァイナがチッチョを通して感じたものは、以前彼女が父の所有する炭鉱に降りていったときに受けた印象に似ている。そのとき彼女はすでに自分のたどり着こうとしていた場所を感じとっていたのだろうか。重い空気がたれこめた坑内で、どろどろとした訛りの強い抗夫の声を聞き、自分まで溶けてしまいそうな、意識が朦朧とするような感覚を経験した。そして坑内から抜け出したとき、その陰鬱な炭鉱地帯が黄金の光で一面おおわれているのを見て、「何と美しく輝かしい場所」(47)なのだろうと思い、そこにノスタルジアさえ感じた。無意識のうちに彼女は自分が切望しているものを感じとっていた。

And so, in spite of everything, poverty, dowdiness, obscurity, and nothingness, she was content to stay in abeyance at home for the time. True, she was filled with the same old, slow, dreadful craving of the Midlands: a craving insatiable and inexplicable. But the very craving kept her still. For at this time she did not translate it into a desire, or need, for love. At the back of her mind somewhere was the fixed idea, the fixed intention of finding love, a man. But as yet, at this period, the idea was in abeyance, it did not act. The craving that possessed her as it possesses everybody, in a greater or less degree, in those parts, sustained her darkly and unconsciously. (48-9)

アルヴァイナがチッチョに惹かれたのは、彼女の中にそのような「闇」に呼応するものがあつたからだ。上昇より下降。光より闇。教育によって培われ作られた自己、社会的自我より、社会のモラルの中で封印されてきたセクシュアリティへの関心も含めて、限りなく無意識に近い自己に目覚め、それを認識したからなのだ。

Dark and insidious he was: he had no regard for her. How could a man's movements be so soft and gentle, and yet so inhumanly regardless? He had no regard for her. Why didn't she revolt? Why couldn't she? She was as if bewitched. She

couldn't fight against her bewitchment. Why? Because he seemed so beautiful, so beautiful. And this left her numb, submissive. Why must she see him beautiful? Why was she will-less? She felt herself like one of the old sacred prostitutes: a sacred prostitute. (288)

アルヴァイナの服従は、チッチョに対してというより、チッチョの「闇」の力のようなものに対してである。イギリスに象徴される機械文明は「光」にばかり目を向け「闇」を封印しようとしてきた。その中で人間は意識にばかり気をとられ、無意識の存在を忘れていた。彼女の性質の中の運命とは、「闇」や無意識の世界を受け入れることだった。

チッチョのいるナッチャ・キー・タワラ座 (Natcha-Kee-Tawara) の一座と共に過ごしながら、彼女は今までの躰や教育によって作られた自分を変えようとしていた。一座の人たちは誰もそれぞれ帰属するものを持たず、自分の価値観に従って生きていた。アルヴァイナのことで一座に白人奴隷売買の疑いがかかって気まぐずくなり、彼女が再び看護婦の職を求めて一座を去ろうとする場面で、「もうぼくたちと一緒にいたくないのか」と質問したチッチョに対し、アルヴァイナが「I can't」と答えたことにも、彼らとアルヴァイナの根本的な考え方の違いが表れている。彼らは共に行動はしているが、一人一人が自由を貫いて生きているのだ。「できない」という答えを、チッチョは軽蔑を込めて一蹴した。チッチョの価値観では、できるできないは問題ではなく、自分が望んでいるかいないか、どうしたいのかが常に判断の基準であった。常に答は自分自身の中にあるということだ。実際、チッチョがアルヴァイナに結婚を申し込んだときも、「僕といっしょにイタリアに来てくれ」ということばだけを繰り返し叫び続けた。可能不可能を基準に物事を考える、他者に判断を委ねて自分の欲求を抑えるのは、教育や躰によって身についた知識や理性による判断だといえる。「新しい女」としてアルヴァイナに必要なのは、判断の基準を他者から自己へ、つまり心の欲求に従って判断すること、自分自身が望んでいるものを信じて行動することであった。

#### 4. 喪失と回復

イギリスを離れイタリアに向かった二人は、南イタリアのペスコカラッシオという村からさらに離れたチッチョの母の生家に落ち着くことになる。

It was night, the train ran better, there was a more easy sense in Italy. Ciccio

talked a little with other traveling companions. And Alvina settled her cushion, and slept more or less till Genoa. After the long wait at Genoa she dozed off again. She woke to see the sea in the moonlight beneath her—a lovely silvery sea, coming right to the carriage. The train seemed to be tripping on the edge of the Mediterranean, round bays and between dark rocks and under castles, a night-time fairy-land, for hours. She watched spellbound: spellbound by the magic of the world itself, and she thought to herself: “Whatever life may be, and whatever horror men have made of it, the world is a lovely place, a magic place, something to marvel over. The world is an amazing place.” (299) (Underlined mine)

イギリスを離れる船から見た祖国が、水中に沈んでいく棺桶のように徹底した死のイメージで描かれていたのとは対照的に、アルヴァイナはイタリアに向かう汽車の窓から銀色に輝く地中海を見て、「人生がどんなものであっても、人間がこの世をどんなに恐ろしいものにしようと、世界は美しい場所であり、不思議な場所であり、驚きを得られるものだ。世界はすばらしい場所だ」と思うのだった。属するものすべてから切り離されロスト・ガールとなった彼女を迎えたのは、人を圧倒するほど美しいイタリアの冬の黄昏であった。

ロレンスがこの小説のタイトルを *The Lost Girl* としたのは、出版の最終段階になってからである。出版社はタイトルを“Bitter Cherry”（チッチョの名前の意味を表す）にすることを薦めていたが、ロレンスは曖昧性のあるタイトルにしたかったようだ。作品の中で、アルヴァイナのことを最初に “a lost girl” と言ったのは、フロスト先生と共に最後までウッドハウスの家を守っていたミス・ピネガー (Miss Pinnegar) だった。

“Your poor father! Your poor father!”

“I’m sure the dead are all right. Why must you pity him?”

“You’re a lost girl!” cried Miss Pinnegar.

“Am I really?” laughed Alvina. It sounded funny.

“Yes, you’re a lost girl,” sobbed Miss Pinnegar, on a final note of despair.

“I like being lost,” said Alvina. (217) (Underlined mine)

チッチョを家に連れてきたアルヴァイナに対してミス・ピネガーが言った “lost” の意味は、性的な意味合いを含む「落ちぶれた、墮落した」という意味に解釈できるだろう。自分たちが守ってきた家にチッチョのような教養もない素性もわか

らない男が足を踏み入れることは許しがたいことで、アルヴァイナ（彼女にとってはお嬢様）がそのような男と関わりを持つとなれば、彼女にとってアルヴァイナは救いようのない「墮ちた女」に違いない。しかし、“I like being lost.”と言ったアルヴァイナにとって、“lost”は墮落ではない。単なる喪失でもない。ジョン・ワーゼン (John Worthen) が “*advantageously lost*”<sup>10)</sup>と指摘するように、ロレンスは、“lost”を「失って新しいものを得る」という肯定的な意味に転換させようとしている。

覚悟はしていたもののイギリスを離れたとたん、アルヴァイナは自分のアイデンティティを失い、自分がチッチョの影になってしまった気がしていた。語り手は繰り返す。

On the cart rattled and bumped, in the cold night, down the highway in the valley. Alvina could make out the darkness of the slopes. Overhead she saw the brilliance of Orion. She felt she was quite, quite lost. She had gone out of the world, over the border, into some place of mystery. She was lost to Woodhouse, to Lancaster, to England—all lost. (306) (Underlined mine)

今まではイギリス社会が彼女の帰属する場所であったが、今、彼女はそれを失った。いや、自ら捨てたことを確認し、徐々に認識する。それが彼女にとって、国境だけではなくあらゆる境界を越えることになるのである。

Making a violent effort she sat up. The silence of Ciccio in his bed was as horrible as the rest of the night. She had a horror of him also. What would she do, where should she flee? She was lost—lost—lost utterly. (313) (Underlined mine)

彼女は自分の居場所を失い、恐怖を感じた。しかし、彼女に逃げる場所はない。

There is no mistake about it, Alvina was a lost girl. She was cut off from everything she belonged to. Ovid isolated in Thrace might well lament. The soul itself needs its own mysterious nourishment. This nourishment lacking, nothing is well. (314) (Underlined mine)

美しい冬の黄昏は、彼女にとっては厳しい現実でもあった。彼女の生まれたウッドハウスの家とは対照的に、二人が落ち着いた家は、家そのものは大きいがほ

とんど家具もない、ただ寝るためだけの「窓もない、古い穴のような家」(314)だった。しかし、家を捨てた彼女に今さら家など必要だろうか。チッチョは、森と畑で仕事をしながらそこに少しずつ手を加えて二人の居場所を作っていくが、あくまで家に執着することはない。春に向かって姿を変えていく周りの自然、「山や谷の神秘的な影響力」(314)が、彼女の魂が求める栄養となり、いつのまにか彼女はチッチョと叔父のパンクラッチオ (Pancrazio) を支える存在にまでなっていく。アルヴァイナは「この小さな孤立した実在感のないすばらしい世界」(331)に身を落ち着け、次第に充ち足りていく自分を認識する。彼女のアイデンティティは、新たな国家や社会に帰属するものの、イギリスが失ってしまった「神秘的な影響力」がまだイタリアにはあるとロレンスが感じていたのもまた事実である。

語り手によって示唆されていた「自分自身が運命である」ということばが、ついにアルヴァイナの口から語られるときがくる。イタリアが宣戦布告し、チッチョが出征するならイギリスに帰って出産しようと一度は考える、彼女はイタリアに残って、「自分のところに戻ってくる」チッチョを待つ決心をした。

“You will come back?” she insisted.

“Who knows?” he replied.

“If you make up your mind to come back, you will come back. We have our fate in our hands,” she said.

He smiled slowly.

“You think so?” he said.

“I know it. If you don’t come back it will be because you don’t want to—no other reason. It won’t be because you can’t. It will be because you don’t want to.”

“Who told you so?” he asked, with the same cruel smile.

“I know it,” she said. (338-39)                      (Underlined mine)

アルヴァイナは、望むか望まないかが運命を決定するのだ、と固く信じている。これは、アルヴァイナが、自分には戻るべき場所がないことをはっきりと自覚し、次は、彼女自身が、自分とチッチョにとっての戻るべき場所となることを心に決めた瞬間であった。

### おわりに

アルヴァイナにとって現実是不安であり、イタリアでの生活は彼女を完全に自

由にするといえるほど楽観的なものではなかった。イタリアの参戦は、ロレンスが期待感を抱いていたイタリアにおいても、彼が危惧していた現実が迫っていることを意味し、小説の結末は世界そのものがいかに不安な状況であったかを示唆している。小説は、「ほんとうに(わたしのところに戻ってくる)?」というアルヴァイナの問いかけで終わっている。先のことはわからないという不安の中でこそ、喪失によって彼女が得た自己の回復、何があるかと運命は自分自身が握っているとの確信は強い。教育を受けることによって社会の階段を昇り、成長し向上する、というのが従来の価値観であったとすれば、ロレンスはこの作品で、成長＝上昇という常識を見事に覆している。アルヴァイナが「物事は常に向上するものなの? 人生って向上すべきものなの?」(183) と尋ねるとき、彼女が教えられてきた価値観も、彼女がそれまで帰属していたイギリスの社会も、一つとして彼女に生きる方向を示すものはなかった。そこでロレンスはあえてアルヴァイナを墮とした。祖国を捨てロスト・ガールとなること、それは、単にイギリスという国家だけではなく、国家や社会といった他者を規範とする生き方に背をむけることであり、アルヴァイナにとっては、どこにも帰属しないという意志を持つことが新たな生き方になるのである。イギリスとの訣別は、アルヴァイナにとってもロレンスにとっても、本来の自己を回復するための「創造的な喪失」を意味するものであった。

### 注

- 1) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. I, ed. by James T. Boulton (Cambridge: Cambridge UP, 1979), p.490. 以下、書簡集第1巻からの引用は LI とし、引用ページを括弧内に記す。
- 2) D. H. Lawrence, *Twilight in Italy and Other Essays* (Harmondsworth: Penguin Books, 1997), p.132. 以下、『イタリアの薄明』からの引用はこの版により、TI とし、引用ページを括弧内に記す。
- 3) D. H. Lawrence, *The Lost Girl*, (Cambridge: Cambridge UP, 1981), p.294. 以下、テキストからの引用はすべてこの版により、引用ページを括弧内に記す。
- 4) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. III, ed. by James T. Boulton and Andrew Robertson (Cambridge: Cambridge UP, 1984), p.91.
- 5) Michel L. Ross, "Losing the Old National Hat: Lawrence's *The Lost Girl*", *D. H. Lawrence Review* 30.1, 2001.
- 6) D. H. Lawrence, "Elsa Culverwell", *The Lost Girl*, (Cambridge: Cambridge UP, 1981), pp.343-58 を参照。
- 7) George Robert Gissing の *The Odd Women* (1893) のこと。
- 8) Hilary Simpson, "Lawrence, Feminism and the War," *D. H. Lawrence* ed. by Peter Widdowson

- (Harlow: Longman, 1992), pp.90-101. [邦訳：吉村宏一・杉山泰ほか訳、『ポスト・モダンのD・H・ロレンス』（松柏社、1997年）]
- 9) K. Mansfield, "Katherine Mansfield on *The Lost Girl*," *D. H. Lawrence: The Critical Heritage*, ed. by R. P. Draper (London: Routledge & Kegan Paul, 1970), pp. 144-45.
- 10) John Worthen, "Recovering *The Lost Girl*: Lost Heroines, Irrecoverable Texts, Irretrievable Landscapes", *D. H. Lawrence in Italy and England.*, ed. by George Donaldson and Mara Kalnins (London: Macmillan Press Ltd., 1999), p.217.

### Works Cited

- 朝日千尺、『D・H・ロレンスのフェミニズムを読む』英宝社、2000
- Black, Michael. *Lawrence's England: The Major Fiction, 1913-20*. New York: Palgrave, 2001.
- Brown, Keith, ed. *Rethinking Lawrence*. Milton Keynes and Philadelphia: Open University press, 1990.
- Daleski, H. M. "The encoding of *The Lost Girl*", *D. H. Lawrence Review* 30. 1, 2001.
- Donaldson, George and Kalnins, Mara, ed. *D. H. Lawrence in Italy and England*. London: Macmillan Press Ltd., 1999.
- Draper, R. P., ed. *D. H. Lawrence: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
- D・H・ロレンス研究会編。『ロレンス研究——「墮ちた女」——』松柏社、1982年。
- Franks, Jill. "Myth and Biography in *Where Angels Fear to Tread* and *The Lost Girl*" *D. H. Lawrence Review* 30.1, 2001.
- 井上義夫。『新しき天と地』（評伝D・H・ロレンスII）小沢書店、1993年。
- Lawrence, D. H. *England, My England and Other Stories*. 1922. Ed. Bruce Steele. Harmondsworth: Penguin Books, 1995.
- \_\_\_\_\_. D. H. *Letters of D. H. Lawrence* I. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge University Press, 1979.
- \_\_\_\_\_. D. H. *Letters of D. H. Lawrence* II. Ed. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- \_\_\_\_\_. D. H. *Letters of D. H. Lawrence* III. Ed. James T. Boulton and Andrew Robertson. Cambridge: Cambridge University press, 1984.
- \_\_\_\_\_. D. H. *The Lost Girl*. 1920. Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- \_\_\_\_\_. D. H. *Twilight in Italy and Other Essays*. 1916. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.
- Ross, Michael L.. "Losing the Old National Hat" *D. H. Lawrence Review* 30. 1. 2001.
- 内田憲男。『D・H・ロレンスとヴィクトリア時代——『家庭の天使』と『新しい女』』松村昌家教授古希記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝 文学・文化・歴史』英宝社、1999。
- Widdowson, Peter, ed. *D. H. Lawrence*. Harlow: Longman, 1992.

(\*本稿は、第21回甲南英文学会（2006年7月1日、於甲南大学）での発表原稿を加筆修正したものである。)

*Billy Budd, Sailor* 再考  
——“An Inside Narrative” に関する一考察——

上野 未央

SYNOPSIS

In *Billy Budd, Sailor*, Herman Melville uses two symbols—a stutter and a rose—to represent Billy's innate disposition. Billy's stutter, which is symbolic of Original Sin, is also the symbol of the unconscious which causes Billy's ruin. At the same time, the unconscious is the origin of vitality for Billy. This aspect of the unconscious is symbolized by Billy's rose.

Through rethinking the unconscious as the existential source of human beings, Melville discovered the real life of human beings in the unconscious which was considered as the origin of sin by Christianity. By relating Billy and a rose, which is symbolic of the real life of human beings and of the Passion, Melville returned to the Christian orthodoxy. As a result, Melville managed to accept Original Sin. Melville delves deeply into human nature, and so he is “the revolutionary forebearer of twentieth-century sensibility.”

はじめに

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の遺作『ビリー・バッド』(*Billy Budd, Sailor*) には、「内面の物語」 (“An Inside Narrative”) という副題が付されている。この副題に関する解釈には、次のようなものがある。ジャイルズ (Paul Giles) は、『ビリー・バッド』における正義は、永遠普遍の真理に基づくものではなく、軍艦という極めて特殊な世界における規律に基づくものであることが、メルヴィルが副題を「内面の物語」にした理由であると述べる (Giles 243)。また、ディリングガム (William B. Dillingham) は、『ビリー・バッド』における外面的出来事の描写は、登場人物の内的葛藤を映し出すものであり、この意味で、メルヴィルは副題を「内面の物語」にしたと解釈している (Dillingham 372)。この登場人物の内的葛藤を示すものであるというディリングガムの弁がある一方で、ブラズウェル (William Braswell) は、この副題が、メルヴィル自身の「精神生活における悲劇的

な葛藤」(“a tragic conflict in Melville’s own spiritual life”)(Braswell 133) を示す言葉であると述べる。ブラズウェルの言葉を借りれば、クラッガート (John Claggart) が “the head” すなわち「理性」を象徴する人物であるのに対して、ビリー (Billy Budd) は “the heart” すなわち「心」を象徴する人物であり、この対照的な二人の男の対立は、それぞれメルヴィルの中の「理性」と「心」の葛藤の投影である。確かに『ビリー・バッド』という作品には、メルヴィルの葛藤が反映されている。しかしながらその葛藤は、メルヴィルの中の「理性」と「心」の葛藤という次元にとどまるものなのだろうか。

『ビリー・バッド』はタイトルどおり主人公ビリーをめぐる物語であるが、「内面の物語」という副題から、メルヴィルの関心がビリーの心のより深層の部分にあったことがわかる。次の引用は、艦長ヴィア (Captain Vere) の前にクラッガートとビリーの二人が呼び出され、クラッガートがビリー告発の要点を述べようとする場面である。

With the measured step and calm collected air of an asylum physician approaching in the public hall some patient beginning to show indications of a coming paroxysm, Claggart deliberately advanced within short range of Billy and, mesmerically looking him in the eye, briefly recapitulated the accusation. (349) <sup>1</sup>

ビリーは様々な点においてクラッガートと対照をなしている。ビリーは、純真無垢であるがゆえに船上では仲間たちからベイビ・バッド (“Baby Budd”) と呼ばれる人気者で、テキパキと任務をこなす健康的な肉体を持った男である。これに対してクラッガートは、「古色を帯びた大理石の色合いに似て、微かに琥珀色がかって青白い」(314) 顔色をした、長身で痩せぎすの男である。クラッガートの額は「骨相学的に並以上の知性があること」(313-14) を示し、彼はその優れた能力でもってたちまち一等警査に昇進している。深慮遠謀を巡らし、ビリーを陥れようとするクラッガートに対し、ビリーは人を疑うことを知らない。この対照的な二人の男が、この引用文の中では、クラッガートは精神科医になぞらえられ、ビリーはあたかも精神病患者であるかのように描かれている。

アンリ・エレンベルガー (Henri F. Ellenberger) の弁によれば、「19世紀全体を通じて、催眠術は無意識心性への基本的接近法でありつづけ」(エレンベルガー 143)、精神療法の一環として用いられていた (エレンベルガー 134)。クラッガートが「催眠術をかけるようにビリーの眼に見入って」(349) 告発の要点を述べたということからも推測できることだが、メルヴィルは、自分の身内に精神病患者

がいたこと、並びに自分にもその傾向があると思っていたことなどから、おそらく催眠術に関する何らかの知識を持っていたと考えて差し支えないであろう。メルヴィルの関心は、ピリーの心のより深層の部分、すなわち無意識と呼ばれる領域にあったように思われる。

メルヴィルは、ピリーの属性の象徴として吃音と薔薇を用いている。ピリーには、「薔薇色の日焼け」(“the rose-tan”) (327, 349, 371) という言葉で形容される健康的な見た目とは裏腹に、吃音という彼にとっては致命傷となる欠陥があって、その吃音は、ピリーが「突然強い感情に取り付かれた時に」(302) 生じる。詳細は後述するが、メルヴィルは、情動的な要因によって生じる吃音という象徴を用いて表層からは計り知れないピリーの深層を呈示していることが考えられる。さらに、「薔薇色の日焼け」という言葉でピリーに結び付けられている薔薇は、薔薇がその赤色によって生命と血を意味する(若桑 13) ことから、ピリーの生命力を表わすものであることが考えられる。

本稿は、吃音と薔薇の象徴性を考察し、ピリーの「内面」すなわち無意識が、どのような領域であるのかを解明することを目的とする。メルヴィルが、無意識に関するどのような認識を持っていたのかを明らかにしたい。

### 1-1. ロマン主義と無意識

まず、無意識の概念に目を向けてみよう。「無意識」の概念を飛躍的に発展させたのは、フロイト (Sigmund Freud) やユング (Carl Gustav Jung) などの深層心理学であるが、彼らにおける「無意識」の概念は、ロマン主義にその起源を有している(エレンベルガー 243)。啓蒙主義における狭隘な人間学を退け、より広い視野で人間を見ることを切望したロマン主義者は、「夢をはじめ、天才、精神病、超心理学、運命の隠れた力など、無意識のありとあらゆる現象形態に関心をよせ」(エレンベルガー 238)、人間の本性を見極めようとした。無意識に関わる諸領域の探求を試みたロマン主義者の中には、人間は自分の意識の及ばない内奥の力に操られる存在であるという人間、及び無意識への悲観的な認識を持つに至る者もいたが、この悲観的な認識を持つロマン主義者の一人がショーペンハウアー(Arthur Schopenhauer) である。

ショーペンハウアーが『意志と表象としての世界』(*Die Welt als Wille und Vorstellung*) の中で述べる盲目的な人間の「意志」とは、人間を翻弄し、人間に苦悩をもたらすものである。<sup>2</sup> メルヴィルは、ショーペンハウアーの『意志と表象

としての世界』を晩年に読んでおり、ショーペンハウアーの考察に共感を覚えたものと思われる。<sup>3</sup> なぜなら、この盲目的な「意志」によって翻弄される存在としてのショーペンハウアーの言う人間が、まさしく盲目的な何かによって翻弄されるビリーの姿に映し出されていると考えることができるからである。では、メルヴィルは『ビリー・バッド』の中にショーペンハウアーの「意志」の概念をどのように反映させているのだろうか。

話を『ビリー・バッド』に戻そう。クラッグアートによって反乱を扇動しているという思いもよらない濡れ衣を着せられたビリーは、艦長ヴィアの前に呼び出され、弁明を求められる。驚愕のあまり言葉がつまり、無実を証明しようにもそれができないビリーは、衝動的にクラッグアートを殴打し死に至らしめる。クラッグアート殺害の場面を見てみよう。

Contrary to the effect intended, these words so fatherly in tone, doubtless touching Billy's heart to the quick, prompted yet more violent efforts at utterance--efforts soon ending for the time in confirming the paralysis, and bringing to his face an expression which was as a crucifixion to behold. The next instant, his right arm shot out, and Claggart dropped to the deck. (350)

メルヴィルは、クラッグアートの告発を聞いたビリーの様子を、「ビリーの頬の薔薇色の日焼けが白いらい病に襲われでもしたようになった。串刺しにされ猿轡をはめられた者のように立っていた」、「ビリーの内にただ異様な唾の身振りと、ゴロゴロ喉を鳴らす音を生み出した」、「全身はカみつんのめらんばかりに、死刑宣告を受けたウェスタ女司祭が生き埋めにされ、窒息の際に苦悶する瞬間のそれに似た表情が顔に現れた」(349)、などと表現し、ビリーにとって告発がどれほど大きな衝撃であったのかを詳細に示している。

ところが、タイトルには「内面の物語」という副題があるものの、告発から殺害へと至る流れの中で、上の引用文においてもそうであるように、メルヴィルは追い詰められていくビリーの心理を分析しようとしなない。ビリーの衝動が、どのような感情から成り立っているのかも説明しない。では、「内面の物語」の「内面」とは一体何を指すのであろうか。人間心理の深層には、はっきりと言葉で言い表すことができたり、明確に分析などできない混沌とした領域、すなわち無意識と呼ばれる領域がある。「内面」とはビリーの無意識を指し、無意識は、その根幹を容易に言葉で表現できたり、分析などできない領域であるということ、メルヴィルはビリーの吃音という象徴を用いて呈示しているのではないだろうか。さら

にビリーの吃音が、意識の制御が利かない無意識の中からの動因によって生じ、その吃音のせいでビリーが身の破滅を招いていることを考慮するならば、吃音はショーペンハウアーにおける「盲目的な人間の意志」と同等のものであると言える。

ところで、人間は「内面の諸勢力に誘導されている非合理的存在」(エレンベルガー 247)であるというショーペンハウアーの人間観、及び無意識は人間を翻弄し、人間に苦悩をもたらすものであるという考察は、精神分析学のフロイトによって継承、発展されることとなる(エレンベルガー 248, Schenk 8)。精神分析学が創始される以前の、ロマン主義における無意識への悲観的な認識と共通の認識を、メルヴィルは持っていたのではないだろうか。

## 1-2. キリスト教と無意識

吃音の象徴性に関しては、さらに考えなければならないことがある。物語の冒頭部分を振り返ってみよう。ビリーの吃音は次のように説明されている。つまり、ビリーの吃音は、「ホーソーンの小説の一つの美しい婦人」のように「目立つ欠点」ではないが、「突然強烈な感情に取り付かれると」「時として発声上の障害」が起こりがちであり、それは、「エデンの嫉妬深いぶち壊し屋、あの大干渉者」が「なおも多かれ少なかれ関係を持っていることの、著しい例証」(302)である。「ホーソーンの小説の一つの美しい婦人」とは、ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の短編「痣」(“The Birthmark”)のヒロイン、ジョージアナ(Georgiana)を指す。彼女の左の頬には小さな痣があり、ホーソーンがジョージアナの痣を、「自然が、その創造物は一時的な、かぎりあるものであるということ[……]を示唆するために、すべての創造物の上になんらかの形で消し去りがたく刻印づける、宿命的な人間の欠陥」(Hawthorne 120)、「妻が罪や悲しみやおとろえや死にさらされる危険の象徴」(Hawthorne 120)、「人間の不完全さをしめすあの唯一の象徴」(Hawthorne 130)と説明していることから、ほとんどの批評家が、ジョージアナの痣は原罪の象徴であると見做している。メルヴィルは、吃音の説明のためにホーソーンの「痣」を引き合いにだし、さらにその吃音は、サタンが「関係を持っていることの、著しい例証」であると述べている。メルヴィルが、吃音の説明をキリスト教の文脈の中にあてはめていることから、ビリーの吃音は、ジョージアナの痣と同様に原罪の象徴と解される。<sup>4</sup>

『新カトリック大事典』第2巻によれば、原罪とは、人祖すなわちアダムとエバの自罪の結果、「成聖の恩恵」を中心とする原始義の状態<sup>5</sup>の喪失を意味する。

この原始義の喪失ゆえに、人類は誰もが生まれながらにして「神のいのちをもたない神との不和の状態」へと陥り、「肉体上の死」をはじめとする「あらゆる悪に苦しめられる」(『新カトリック大事典』第2巻 781)ようになった。つまり、原罪とは、人間の不完全性にほかならず、ここから「人間の不完全さをしめす象徴」とであるとされるピリーの吃音が、原罪の象徴と解釈できることになる。

ではなぜ、メルヴィルは吃音を原罪の象徴としたのか。先ほど吃音は人間を翻弄する無意識を象徴するものであることを論じた。原罪の象徴としての吃音を無意識との関連において考えてみよう。キリスト教徒は無意識をどのように見做していたのだろうか。シェパード (Paul Shepard) は「ピューリタンたちのプライドの高い自意識の背後には、自身の有機体に対する絶望、コントロールできない自己の無意識の側面への恐怖がある」(Shepard 87) と述べている。つまり、シェパードによれば、意識下の混沌とした領域への恐れを抱いているキリスト教徒は、キリスト教における道徳観や倫理観でもって、人間から自由を奪い、人間を締め付けており、この意味で、キリスト教徒は自分の意志で制御できない無意識を、人間に破滅をもたらす罪の根源と見做している。こうした思想的背景を考慮に入れば、メルヴィルの目に、人間のあり方がそのようなものとして映っていたと考えると差し支えないであろう。例えばその例として、『モビー・ディック』(*Moby-Dick or the Whale*) における「壁」や、ピエール (Pierre Glendinning) やバートルビー (Bartleby) の描き方などを挙げることができる。メルヴィルは吃音の象徴性に、ロマン主義における無意識への悲観的な認識を反映させるのみならず、キリスト教における無意識観を反映させ、原罪の象徴としての意味合いを持たせたのである。それゆえロマン主義における無意識への悲観的な認識と、キリスト教徒が抱いている罪の根源としての無意識観との二重の意味を、吃音の象徴性に読み取ることができる。

では、無意識は、ショーペンハウアーの哲学やキリスト教において見られるように、人間にとって悲観的な側面をのみ持つものなのだろうか。もちろん、無意識は必ずしもそれのみではない。キリスト教徒にとっての無意識はともかく、ロマン主義者にとっての無意識は、エレンベルガーの指摘にもあるように、創造力の源泉であり、「不可視の宇宙生命に根ざす人間存在の真の根底」であるから、「人間と自然を真に結合する絆」である。ロマン主義者にとって、アダムの墮落以来失われた人間と自然との根源的な共感、無意識的な感覚、すなわち「神秘的脱我恍惚状態、詩的芸術的靈感、磁気夢遊病、夢」(エレンベルガー 242) によってのみ、その回復が可能となる。メルヴィルは、無意識を野蛮で強力なエネルギー

一によって人間に破滅をもたらすもの、罪の根源としてのみ捉えてはおらず、「人間存在の真の根底」としての無意識の意義を認識していたように思われるが、メルヴィルが認識したその意義は、『ビリー・バッド』の中にどのように描き出されているのだろうか。次に、ビリーの健康的な肉体に結び付けられている薔薇に着目し、その象徴性について考えてみよう。

## 2. ビリーと薔薇

薔薇は、「再生のシンボル」である（『世界シンボル大事典』799）。キリスト教世界においては、薔薇は、その赤色がキリストの血と結びつき、贖罪の象徴と見做されている（『世界シンボル大事典』798）。ビリーの死が、キリストの死と同じ受難であるとはまでは言えないにしても、<sup>6</sup>メルヴィルにとって薔薇が重要な意味を持つ花であることは確かである。メルヴィルにとって薔薇はどのような意味を持つのだろうか。そして、メルヴィルは、如何にして薔薇の象徴性をビリーの属性に反映させているのだろうか。

ビリーは健康的な見た目の美しさゆえに仲間たちから「花形水夫」（“the Handsome Sailor”）と呼ばれている。とりわけその日焼けした顔の色艶については、クラッグートの「蒼白い顔の理知的な表情」とは著しく異なるものとして、メルヴィルは次のように述べている。

But the form of Billy Budd was heroic; and if his face was without the intellectual look of the pallid Claggart's, not the less was it lit, like his, from within, though from a different source. The bonfire in his heart made luminous the rose-tan in his cheek. (326-27)

「薔薇色の日焼け」（“the rose-tan”）という言葉が示すように、日焼けしたビリーの健康美は、薔薇に結び付けられ、さらに万物の生命の根源である太陽にも結び付けられている。しかもその美しさは、ビリーの内奥から放たれるものであることが語られている。万物の生命の根源である太陽と、「その赤色によって生命と血を意味する」とされる薔薇の象徴性とを併せて考慮するならば、「薔薇色の日焼け」という言葉は、ビリーの容姿が単に日焼けして健康的であるということを示す言葉ではなく、ビリーの健康的な肉体美と、その内奥にみなぎる生命力を象徴する言葉であると言える。

メルヴィルは、死刑宣告を受けてから刑が執行されるまでのビリーの様子を、

ビリーの「頬骨の輪郭は、暖色の皮膚の下で微かに目立ち始めていた」(371)と語り、その憔悴した姿を示しながらも、ビリーの「薔薇色の日焼け」については、それが消えることはあり得ないこととして、次のように述べている。

Through the rose-tan of his complexion no pallor could have shown. It would have taken days of sequestration from the winds and the sun to have brought about the effacement of that. (371)

ビリーを破滅へと追いやる衝動を噴出させた深層の領域は、ビリーが短いながらもその生涯を快活に生き、「申し分のない水夫」(302)としての任務をこなすために必要な活力、生命力の源泉でもある。その活力は、薔薇と太陽に象徴され、ビリーを「花形水夫」たらしめている。メルヴィルは、薔薇と太陽の象徴性とを織り交ぜ、「薔薇色の日焼け」という言葉に「人間存在の真の根底」にある根源的な人間の生命力を託しているのではないだろうか。

次に、ビリー昇天の場面を見てみよう。この場面においても、ビリーは薔薇のみならず、太陽に同化、一体化していることが語られている。しかしながら、薔薇は単にビリーの生命力を象徴する花にとどまるものではないようだ。

At the same moment it chanced that the vapory fleece hanging low in the East was shot through with a soft glory as of the fleece of the Lamb of God seen in mystical vision, and simultaneously therewith, watched by the wedged mass of upturned faces, Billy ascended; and, ascending, took the full rose of the dawn. (376)

ビリーの昇天は、「羊毛のような片雲」、「神の子羊」、「曙光の輝く薔薇色」という言葉が示すように、キリスト教の文脈の中におかれている。ブリッジマン (Richard Bridgman) によれば、メルヴィルにとって薔薇は神聖を象徴する (Bridgman 244)。マイルダー (Robert Milder) は、メルヴィルと薔薇との結び付きに注目した自身の論考の中で、『ビリー・バッド』において、メルヴィルは、神との和解にまでは至っていないにしても、『モビー・ディック』や『ピエール』 (*Pierre or The Ambiguities*) の時期に見られた神への対決姿勢は消えていると指摘している (Milder 106)。

確かに、薔薇は天国を象徴する花であるから (若桑 80)、メルヴィルが薔薇を通してビリーと楽園との結びつきを暗示しているというのは頷ける。それは、『モビー・ディック』におけるエイハブ (Ahab) のように、人間が人間であることを認めず原罪を否定し、神への挑戦を試みていた人物像から、ビリーのように、原

罪を受け入れて生きる、すなわち人間が人間としての分を棄てて生きる人物像へと、人間のあり方に関するメルヴィルの中の意識の変化を示しているものと考えてよいのではないか。メルヴィルは、ビリーが「死が現実は何であるか、子どものように理解できなかったわけではない。とんでもない」としながらも、ビリーは「死に対する不合理な恐れを全く持っていなかったのだ、あらゆる点で純然たる「自然」にずっと近い、いわゆる野蛮な社会よりも高度に文明化された社会において遥かに広く行渡っている恐れを」(372)と述べている。このことから、メルヴィルは、神に反抗する人間の姿を描きつづけた末、晩年に至ってようやく原罪を受け入れる境地へと到達したものと思われる。

メルヴィルは、「今では一般的に無視されている人間の「墮落」説」(301)と言いながら、ビリーに吃音という原罪を負わせ、しかしその昇天は、薔薇で色づけビリーと楽園との結びつきを暗示している。つまり、ビリーを薔薇と結びつけることを通して、メルヴィルは、もう一度、人間が個としての人間に立ち返り、死という現実を受容することの意義を示唆しているものと思われる。

死を受け入れるということは、すなわち新たな生命への志向を意味する。薔薇は、メルヴィルにとっては、キリストの血と結びつく花でありながら、「人間存在の真の根底」にある根源的な人間の生命力を象徴する花としての意味を合わせもっている。しかもメルヴィルが薔薇に託した根源的な人間の生命力には、薔薇が「再生のシンボル」であることから、メルヴィル自身の再生への希望が含まれているものと理解したい。薔薇は、ビリーの生命力を象徴する花であると同時に、メルヴィルにおけるキリスト教そのものへの認識の変化を示す花でもあるのではないだろうか。

### 3. 結論

吃音と薔薇をビリーの属性を象徴するものとして考察した結果、次のことが明らかになった。つまり、原罪の象徴としてのビリーの吃音は、人間に破滅をもたらす無意識を象徴する。それは、ロマン主義における無意識への悲観的な認識と、キリスト教における無意識観を反映させたものである。しかし、無意識は人間の生命力の源泉でもある。この根源的な人間の生命力を、メルヴィルは「薔薇色の日焼け」という言葉に託し、さらにビリーを薔薇と結びつけることを通して、晩年における自身のキリスト教そのものへの認識の変化を示唆している。

予ねてから、メルヴィルは意識の方にだけ重点を置くキリスト教徒のあり方に

疑問を持っていた。ベリポテント (Bellipotent) 号に乗船する従軍牧師の存在を「クリスマスの祭壇上の小銃と等しく矛盾した存在だ」(374) と述べるなど、メルヴィルにとってもはや形骸化したキリスト教への不信感はあるばかりであったと思われる。そこで、メルヴィルは人間本性の本質をあらためて考え直した。それは、メルヴィルにとっては、人間にとって宗教は、キリスト教はどうあるべきかへの問いでもあっただろう。無意識に関する探求の結果、メルヴィルはキリスト教徒が罪の根源と見做す無意識の中にこそ人間にとっての真の生命があることを認め、そのようなものとして無意識を認めることによって人間が人間であることを受け入れる境地へと到達している。と同時にそれは、メルヴィルに、形骸化される以前のキリスト教そのものへの認識の変化——原点回帰——をもたらしている。

メルヴィルは、ピリーの「内面」を掘り下げより深い次元で人間を捉えている。その深い次元で得られる洞察は、フロイトやユングによって継承、発展され、モダニズム文学が取り上げることになる内容のものである。したがってメルヴィルは、まさにモード (Ralph Maud) が言う「20世紀の感性の革命的先駆者」(Maud 696) なのである。

## 注

- 1 テキストには *Billy Budd, Sailor and Other Stories*. Ed. Frederick Bush. Harmondsworth: Penguin Classics, 1986. を使用した。以下この本からの引用は本文中にカッコで頁数のみを示す。
- 2 ショーペンハウアーは『意志と表象としての世界』の中で、現象を表象とよび、物自体を意志とよんでいる。意志は、「各個別のもの、ならびに全体をなすものの、内奥であり、核心」であり、「盲目的に作用しているすべての自然力のうちに現象する」(ショーペンハウアー 262)。しかも意志は、「飢えたる意志であるから」、人間における「狂奔、不安、苦悩、いずれもここに由来する」(ショーペンハウアー 326)。意志は「盲目的衝動として」、「暗い原動力として」(ショーペンハウアー 320) 自然を支配し、人間を翻弄する。つまり、ショーペンハウアーの意思とは、人間には意識しえない盲目的な衝動であり、「制御し難いもの」(ショーペンハウアー 581) であるから、人間の苦悩は、この盲目的な人間の意志によってもたらされる。エレンベルガーはこの盲目的な人間の意志を「一部のロマン主義者が考えた無意識と同等のもの」と述べている(エレンベルガー 247)。本稿においても、ショーペンハウアーにおける「意志」を無意識と同等のもののみならず、
- 3 メルヴィルとショーペンハウアーとの関連性を指摘した批評家はあまりいないが、その数少ない批評家の一人である Olive L. Fite も指摘しているように、『ピリー・パッド』執筆中のメルヴィルにショーペンハウアーが影響を与えた可能性は大きい (Fite 337)。
- 4 Hershel Parker によれば、ピリーの吃音は従来原罪の象徴と解釈されている(Parker 107)。
- 5 原始義の状態とは、「成聖の恩恵」を中心とする「超本性的賜物」と、人間本性を補い、

より完全にする「外本性的賜物」からなる。前者は、人間が罪の汚れない状態のまま、永久に神のいのちにあずかり幸せでいられることを意味し、後者は、人間が、肉体の不死や無苦や本性的欲望を完全統御できる状態のことをいう（『新カトリック大事典』第2巻 781）。

- 6 ちなみに、ルーイス(R. W. B. Lewis)は『アメリカのアダム』(*The American Adam*)の中で、ビリーを「贖い主」と解釈している (Lewis 151)。

### Works Cited

- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor. Billy Budd, Sailor and Other Stories*. Ed. Frederick Busch. Harmondsworth: Penguin Classics, 1986.
- Hawthorne, Nathaniel. “The Birthmark.” *Nathaniel Hawthorne’s Tales*. Ed. James McIntosh. New York: W. W. Norton, 1987.
- Braswell, William. “Melville’s *Billy Budd* as ‘An Inside Narrative.’” *American Literature*, 29, 1957.
- Bridgman, Richard. “Melville’s Roses.” *Texas Studies in Literature and Language*, 8, 1966.
- Dillingham, William B. *Melville’s Later Novels*. Athens: The U of Georgia P, 1986.
- Fite, Olive L. “Billy Budd, Claggart, and Schopenhauer.” *Nineteenth-Century Fiction*, 23, 1968.
- Giles, Paul. “‘Bewildering Intertanglement’: Melville’s Engagement with British Culture.” *The Cambridge Companion to Herman Melville*. Ed. Robert S. Levine. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam*. Chicago: The U of Chicago P, 1955.
- Maud, Ralph. “Archetypal Depth Criticism and Melville.” *College English*, 45, 1983.
- Milder, Robert. “Old man Melville: the rose and the cross.” *New Essays on Billy Budd*. Ed. Donald Yonnella. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Parker, Hershel. *Reading Billy Budd*. Evanston: Northwestern UP, 1990.
- Schenk, H. G. *The Mind of the European Romantics*. Oxford: Oxford UP, 1979.
- Shepard, Paul. *Nature and Madness*. Athens: The U of Georgia P, 1998.
- エレンベルガー, アンリ. 『無意識の発見』. 上. 弘文堂, 1980年.
- ショーペンハウアー, アルトゥル. 『意志と表象としての世界』. 西尾幹二訳. 『ショーペンハウアー』. 中央公論新社, 1980年.
- 若桑みどり. 『薔薇のイコノロジー』. 青土社, 2003年.
- シュヴァリエ, ジャン, アラン・ゲールブラン. 『世界シンボル大事典』. 金光仁三郎他訳. 大修館書店, 1996年.
- 新カトリック大事典編纂委員会編. 『新カトリック大事典』. 第2巻. 研究社, 1998年.

(\*本稿は第22回甲南英文学会(2007年6月30日、於甲南大学)における研究発表の原稿に加筆したものである。)



# Sluicing における継承体系分析

根之木 朋貴

## SYNOPSIS

This paper discusses the remnant *wh*-phrases in a sluicing structure by proposing a modified version of the inheritance system whose account is based on Chomsky (2005a, 2006).

First, Merchant (2001) presents an argument, based on lifting the Subject condition effects under sluicing, for the idea that ellipsis suspends the requirement that the subject raises to Spec, IP (EPP). On the contrary, Lasnik & Park (2003) think of the EPP as a necessary structural requirement, especially when putting an emphasis on the semantic property, for a sluicing structure to be interpreted properly. Thirdly, den Dikken *et al* (2000, 2007) present neutral arguments that the EPP is likely to have a PF condition but be suspended when IP is elided. Either way, their arguments devote too much time to arguing whether the EPP under sluicing is a necessary condition or not.

We reject their proposals by resorting to the minimalist remarks that computations of Languages should be as economical as possible and that consideration of EPP in itself may be superfluous. As an alternative to their proposals, we adopt the modified inheritance system mentioned above by insisting that *C-T* and *n-D* inheritance systems drive both DP-movement and *wh*-movement, respectively, to check off their agreement and edge feature simultaneously without appearing to EPP. Moreover, we extend this inheritance system to the level of *Negative Phrases (NegP)* by resorting to the *Neg-n* inheritance or *Neg-T* inheritance system, so that we can capture the impossibility of the remnant *wh*-phrases in a sluicing structure with NPI re-analyzed.

Finally, we try to allow for a unified account of the inheritance system with the *preposition-Neg* inheritance system (in French) and the *particle – Neg* inheritance system (in Japanese).

## 0. 序

本稿では Ross(1969)以降、様々な分析がなされてきた間接疑問縮約規則(slucing)に関して適切な派生過程を提案することを目標としたい。このような slucing の文として (1a-c)が考えられる。

(1) a. Jack bought something but I don't know what.

b. Jack called but I don't know {when / how / why / where from}.

c. Sally's out hunting – guess what! (Boeckx 2007.138)

(1a-c)は全て接続詞以下の文は発音されず、間接疑問文の WH 表現のみが残され、残りの時制節部分が削除されている。このような間接疑問文縮約規則に従う構造を slucing という(以下、slucing 構造)。このような slucing 構造には様々な形式の文、文構造、分析があるが、本稿では主に以下(2)-(4)にみられる主語位置の WH 移動を伴う slucing 構造に関して考察し、それぞれの文に考えられる3つの問題点(I-III)を掲げ、その解決を試みることで適切な派生過程を提案したい。

[問題点(I):slucing 構造と通常の WH 移動はいかなる点で異なるか]

(2) a. A biographer of one of Marx brother is going to be published

–guess[which(Marx brother)][<sub>TP</sub> ~~is going to be published~~[a biographer of *t<sub>i</sub>*]]

b. \*[Which Marx brother]<sub>i</sub> did she say [a biography of *t<sub>i</sub>*] is going to be published this year? (Merchant 2001.185)

[問題点(II): slucing 構造には EPP は必要か。]

(3) Many pictures weren't displayed at the exhibit, but I don't know [of whom]<sub>i</sub>

[<sub>TP</sub>[many pictures *t<sub>i</sub>*]~~weren't displayed at the exhibit.~~] (Lasnik&Park 2003.656)

[問題点(III): なぜ slucing では NPI 再分析が不可能か]

(4) \*She doesn't meet anyone for dinner. They can't figure out who.

(Chung, Ladusaw & McCloskey 1995.255)

## 第1節

では先行研究として Merchant (2001)、Lasnik&Park (2003)、そして den Dikken,

Meinunger & Wilder (2000)、van Craenenbroeck & den Dikken (2007)を取り上げる。最初に sluicing 構造で EPP を仮定しない Merchant と、次に解釈の面から構造的な要求として EPP を義務付けている Lasnik & Park、最後に EPP を仮定することに関して随意性を主張する den Dikken, Meinunger & Wilder, van Craenenbroeck & den Dikken を検証し、いずれの分析も sluicing 構造で EPP を仮定することの余剰性と NPI 再分析がなぜ不可能か説明できない点を指摘する。第 2 節、第 3 節ではこれら先行研究の問題点の解決案として、端素性と一致素性照合を同時に適用する Chomsky (2005a, 2006) の継承体系 (inheritance system) を採用することで、特別に EPP を仮定せずとも継承体系を土台にして sluicing 構造を適切に派生できることを主張する。さらに、NPI の再分析が sluicing 構造でなぜ不可能かに関しては、この体系を否定節形成にまで拡張し any の持つ否定要素が D への継承後、軽名詞句の指定部へ移動するが、次の C-T 継承時は未照合のまま残留するため再分析できないと主張する。次に NPI の再分析が可能な擬似分裂文を派生し本稿の分析を整合化する。第 4 節ではフランス語の前置詞句と日本語不変化詞「も」を検証し、否定素性継承一般化の可能性を模索する。第 5 節はまとめである。

## 1. sluicing 構造をめぐって

### 1.1 移動と削除

本節では一般的な sluicing 文の派生について概観する (下線部は筆者による)。

(5) a. Jack bought something but I don't know what.

b. Jack called but I don't know {when / how / why / where from}.

c. Sally's out hunting – guess what!

(6) a. **movement**; [<sub>CP</sub> e [<sub>C'</sub> C' [<sub>TP</sub> [<sub>T'</sub> [<sub>VP</sub> XP [<sub>V</sub> Z [ WH<sub>i</sub> ]]]]]]]



b. **deletion**; [<sub>CP</sub> WH<sub>i</sub> [<sub>C'</sub> C' [<sub>TP</sub> [<sub>T'</sub> [<sub>VP</sub> XP [<sub>V</sub> Z [ WH<sub>i</sub> ]]]]]]] ((5)-(6) Boeckx 2007.138-139)

(5a-c) の下線部の WH 表現はどのように派生されるのか。具体的には (6a) で WH 表現が

通常の WH 移動のように CP 指定部へと移動し、さらに時制節以下は削除される、という二重の操作が駆動される、結果的に PF 上発音されないため結果として sluicing 構造が形成されるのである。<sup>1</sup>

次節では主に(2)-(4)にみられる主語位置の WH 移動を伴う場合の sluicing 構造に関してどのような分析がなされ、いかなる問題点があるか Merchant (2001)、Lasnik&Park (2003)、den Dikken, Meinnunger & Wilder (2000)、van Craenenbroeck & den Dikken (2007)を概観する。

## 1.2 分析の焦点

本稿で主に分析対象とする sluicing 構造は以下(7)、(8)、(9)の3型の文に焦られる。

(7) A biographer of one of Marx brother is going to be published

–guess[which(Marx brother)][~~TP is going to be published~~[a biographer of  $t_i$ ]]

(8) Many pictures weren't displayed at the exhibit, but I don't know [of whom];

[~~TP many pictures  $t_i$  weren't displayed at the exhibit.~~]

((7)Merchant 2001.185, (8) Lasnik&Park 2003.656)

(9) \*She doesn't meet anyone for dinner. They can't figure out who.

(Chung, Ladusaw & McCloskey 1995.255)

本稿では、主に3つの先行研究に焦点を当てる。まず Merchant (2001)の(7)の sluicing 構造上時制節指定部を経由しての移動しない分析と、次にその反論である

Lasnik&Park (2003)の(8)のように解釈的側面から構造的な要求として EPP を義務付ける

分析と、そして最後に EPP を仮定することに関して随意性を主張する den Dikken,

Meinnunger & Wilder (2000)、van Craenenbroeck & den Dikken (2007)の分析を検証する。

その結果、最終的にいずれの分析も(9)のような sluicing 構造では NPI 再分析がなぜ不可能か説明できないという点で問題があることを指摘する。

### 1.2.1 Merchant (2001) – sluicing と主語条件

本節では Merchant (2001)を検証する。まず通常の WH 移動である(10)と、その(10)に対応する sluicing 構造である(11)とを比較し、その派生構造を検証する。

(10) a. \*[Which Marx brother]<sub>i</sub> did she say [a biography of  $t_i$ ] is going to be published this year?

b. \*[Which Marx brother]<sub>i</sub> did she say [a biographer of *t<sub>i</sub>*] interviewed her?

(11) a. A biography of one of Marx brother is going to be published this year

–guess which(Marx brother)[a biographer of *t<sub>i</sub>*]is going to be published...

b. A biographer of one of Marx brother interviewed her,

but I don't remembers which (Marx brother)[a biographer of *t<sub>i</sub>*]interviewed her...

((10)-(11) Merchant 2001.185)

Merchant は(10a-b)の WH 移動が不適切な要因として WH 句(Which Marx brother)は従属節内部では主語名詞句の一部であるためそこからの抜き出しは主語条件に抵触することが理由であると主張している。しかし、同様に考えると(11a-b)の sluicing 構造ではたとえ WH 移動が行われたとしても主語位置を経由できないことになる。その理由として Merchant は、(10a-b)には(12a-b)、(11a-b)には(13a-b)とそれぞれの内部構造を提示している。

(12) a. [<sub>CP</sub> [which(Marx brother)]<sub>i</sub>] [<sub>C</sub> did [<sub>TP</sub> she say [a biography of *t<sub>i</sub>*]

is going to be published this year]]

b. [<sub>CP</sub> [which(Marx brother)]<sub>i</sub>] [<sub>C</sub> did [<sub>TP</sub> she say [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> [a biographer of *t<sub>i</sub>*]  
interviewed her]]]]]]

(13) a. [which(Marx brother)]<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> is going to be published [a biographer of *t<sub>i</sub>*] this year]

b. [which(Marx brother)]<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> [a biographer of *t<sub>i</sub>*] interviewed her.]

((12)-(13) Merchant 2001.187)

(12a-b)の通常の WH 移動と異なり、sluicing 構造である(13a-b)の WH 句の移動は主節の指定部を経由するものではなく従属節の目的語位置から直接的に移動しているため、結果的に時制節指定部の主語位置から移動するものではないため主語条件に抵触することはない。この仮定が可能な理由として、Merchant は sluicing 構造には EPP が要請される必要がないからだと結論付けている。

### 1.2.2 Lasnik&Park(2003)-sluicing と EPP

Lasnik&Park (2003)は、1.2.1 で概観した Merchant (2001)の分析を批判的に検討し、主語位置により解釈が異なる(14a-b)とそれに対応する sluicing 構造(15)の間に見られる解釈的側面を比較することで、たとえ sluicing 構造とはいえども構造的要素として EPP が必要であると主張している。

(14) a. There weren't many pictures at the exhibit. (Neg > Q)

b. Many pictures weren't at the exhibit. (Q > Neg)

(15) Many pictures weren't displayed at the exhibit, but I don't know [PP of whom]. (Q > Neg)

((14)-(15) Lasnik&Park 2003.656)

Lasnik&Park は、sluicing 構造にも時制節指定部が満たされなければならないと主張する前提として(14)を提示し、(14a)は否定が数量詞より広い意味をとり、逆に(14b)では数量詞が広い意味をとり解釈に曖昧性がないことを観察している。この事実を sluicing 構造にも適用すると、(15)の解釈は数量詞が広い意味をとり解釈に曖昧性がないため、主語が主節時制節指定部に生起しない(14a)ではなく(14b)のように解釈される。この事実を踏まえると(15)には(16a-d)の派生構造が考えられる。

(16) a. [TP e [T weren't displayed [many pictures [PP of whom]]]]...

b. [CP e [C C [TP [many pictures [PP of whom]]; [T weren't displayed t<sub>i</sub>]]]]...

c. ...but I don't know [CP [PP of whom] [C C [TP [many pictures t<sub>pp</sub>] weren't displayed...]]

d. but I don't know [CP [PP of whom] [C C [TP [many pictures t<sub>pp</sub>] weren't displayed...]]

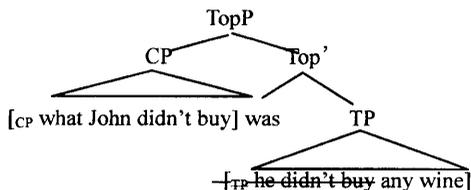
Lasnik&Park は、(16a)に対して、時制による EPP 要請の基(16b)で名詞表現全体(many pictures of whom)が移動するため(16c)に類した数量詞が広い作用域をとると主張する。次に C の指定部へ前置詞句が抜き出される。最終的には(16d)で、さらに時制節以下は発音されないため削除される。このように Lasnik&Park は従来の移動と削除という二重の操作により sluicing 構造を派生している。

### 1.2.3 den Dikken *et al* (2000, 2007)- PF 条件としての EPP

本節では Lasnik&Park (2003)の問題点を指摘したい。den Dikken, Meinunger &

Wilder (2000)、van Craenenbroeck&den Dikken (2007)(以下 den Dikken *et al* (2000, 2007))は、Lasnik&Park 分析の予測に反し、削除対象となる構造には EPP が要求されず、むしろ非文法的な文を生成する例が存在するのである。まずは den Dikken *et al* が提示する(17)-(18)とそれらの LF 構造(19)をみよう。

- (17) a. What John didn't buy was any wine.    b. What nobody bought was any wine.  
 (18) a. What didn't they buy? – Any wine.    b. What did nobody buy? – Any wine.  
 (19)

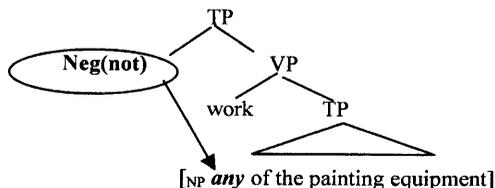


((17)-(19) van Craenenbroeck&den Dikken 2007.658)

(17)と(18)において否定極性項目(以下、NPI)である any が適切に認可されているか説明するために、den Dikken *et al* は(19)の LF 構造を仮定している。(16)では時制節が削除される以前に完全に時制節が形成されていて、その時点で NPI 認可関係が成立しているのだと主張している。<sup>2</sup> ゆえに時制節が形成される点では Lasnik&Park の分析と共通することが結論付けられるが、den Dikken *et al* は EPP を随意的な PF 条件によるものだと考えている。さらに den Dikken *et al* は、時制節が形成されてはならない(20a-b)とその LF 構造(21)、そして(22)の事実を議論の対象にしている。

- (20) a. What didn't work was any of the painting equipment.  
 b. What didn't work? – Any of the painting equipment.

(21)



- (22) \*Any of the painting equipment didn't work.

((20)-(22) van Craenenbroeck&den Dikken 2007.658)

(20a-b)の LF 構造である(21)は完全に時制節指定部が満たされていない点に注意したい。(20a-b)で N PI である *any* が認可されるのは、時制節が形成されていない(21)の時点でその関係が成立しているからであり、むしろ時制節指定部が満たされてはならない(22)が非文法的であることが証拠としてあげられる。ゆえに *den Dikken et al* は *sluicing* 構文、擬似分裂文などの削除文における EPP の随意性を主張している。言い換えると、*den Dikken et al* の分析はこれまで既に概観してきたように *sluicing* 構造における反 EPP を唱える 1.2.1 節の Merchant(2001)、逆に 1.2.2 節で *sluicing* 構造の EPP 仮定を擁護する Lasnik&Park (2003)とは中立的な立場に位置付けられることになる。

#### 1.2.4 *sluicing* と Ross (1969)の制約

1.2.3 節において *den Dikken et al* (2000, 2007)による Lasnik&Park (2003)への反論を概観してきたが本節では時制節が完全に形成される文と *sluicing* 構造とでは相違点がある点を指摘することで、さらに Lasnik&Park の主張には問題があることを指摘したい。さらに、1.2.1 で概観したように *sluicing* 構造では EPP を仮定しない Merchant (2001)でも充分には説明できない点を指摘する。

まずは Ross (1969)で観察されている(23)-(25)をみよう。

#### (23) 等位構造制約(The Coordinate Structure Constraint)

a. \*Irv and someone were dancing together

but I don't know who Irv and someone were dancing together.

b.? Irv and someone were dancing together but I don't know who.

#### (24) 文主語制約(The Sentential Subject Constraint)

a.\*That he will hire someone but I won't divulge who that he will hire is impossible.

b.?That he will hire someone but I won't divulge who.

#### (25) 複合名詞制約(The Complex NP Constraint)

a. \*She kissed a man who bit one of his friends,

but Tom realize which one of my friends she kissed a man who bit.

b. ?She kissed a man who bit one of his friends,

but Tom doesn't realize which one of my friends. ((23)-(25) Ross 1969:275)

Ross の分析では sluicing 構造は(23)の等位構造制約(The Coordinate Structure Constraint)と(24)の文主語制約(The Sentential Subject Constraint)、(25)の複合名詞制約(The Complex NP Constraint)などの制約に対してそれほど従順ではないことが観察されている。<sup>3</sup> (23a)、(24a)、(25a)は全て等位接続詞(and, but)以下の時制節が完全に形成されており第一節との並行性を失うためそれぞれの制約に違反するものとして排除される。一方(23b)、(24b)、(25b)は間接疑問より下の投射を削除した sluicing 構造の場合に限り完全に非文法的であるものとしてはみなされない。<sup>4</sup> とはいえ、これらの事実は Merchant 分析のように sluicing 構造の EPP を排除する方向で説明したとしても 1.2.2 で指摘した解釈上の対比を説明することができない。

### 1.3 den Dikken, et al の問題点

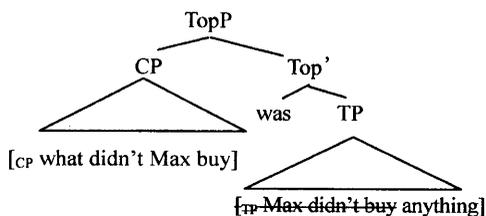
1.2.3 では den Dikken et al (2000, 2007)の分析を概観し、sluicing 構造上 EPP を仮定することにに関して中立的立場が妥当であることをみてきたが、本節では彼らの分析の問題点を指摘したい。

以下、Merchant (2004)による(26)の疑問文-返答文の組み合わせと、1.2.3 節で概観した den Dikken et al の分析を(26)に適用した際に予測される LF 構造である(27)をみよう。

(26) What didn't Max read?—\*Anything. (cf. What didn't they buy?—Any wine.)

(Merchant 2004:691)

(27)



(cf. He didn't buy anything.)

Merchant の提示する(26a)の疑問文と返答文のペアが成立しているのに対して返

答文が *anything* である(26b)の場合に限り、その関係が成立せず、結果的に非文法的となる。だが、den Dikken *et al* の分析を(26b)にも適用すればその返答文の LF 構造は(27)のようになりいずれも文法性が予測されるはずだ。そう考えると、den Dikken *et al* の分析ではなぜ *anything* は *any wine* などと認可関係が異なるのか、さらに否定節認可に関してどのような点で異なるかが説明できず、現状のままでは区別することができない。よって否定節構造上で *any wine* が認可され、*anything* が不可能である環境はどういうものなのか、またこの否定節における NPI の認可体系を詳細に明確化する必要があるだろう。<sup>5</sup>

さらに den Dikken *et al* 分析の問題点を指摘したい。(28)とその内部構造(29)-(30)をみよう。

(28) a. \* They never talk to any student: I wonder who.

b. \* She doesn't meet anyone for dinner. They can't figure out who. (Neg > any)

(Chung, Ladusaw & McCloskey 1995.255)

(29) a. ...I wonder [<sub>CP</sub> who [<sub>C'</sub> C [<sub>TP</sub> doesn't talk to *any* student ]]]

b. \*deletion ...I wonder [<sub>CP</sub> who [<sub>C'</sub> C [<sub>TP</sub> ~~doesn't talk to any student~~ ]]]

(30) a. ...They can't figure out [<sub>CP</sub> who [<sub>C'</sub> C [<sub>TP</sub> doesn't meet anyone for dinner ]]]

b. \*deletion...They can't figure out [<sub>CP</sub> who [<sub>C'</sub> C [<sub>TP</sub> ~~doesn't meet anyone for dinner~~ ]]]

den Dikken *et al* の分析では(28)は全て時制節以下が LF 部門で復元されるため、その構造として(28a)には(29a-b)、(28b)には(30a-b)を仮定したとしても、たとえ(29a)、(30a)の構造では NPI が認可されているという説明できるにもかかわらず(29b)、(30b)でみられる削除操作が成立しないのはなぜかという疑問が残り、den Dikken *et al* の分析では NPI 認可の過程が曖昧であると結論付けられる。

#### 1.4 先行研究の問題点

これまで sluicing をめぐって Merchant (2001)、Lasnik & Park (2003)、den Dikken *et al* (2000, 2007)を概観してきたがこれらの分析の問題点を要約すると(31a-c)のようになる。

## (31) a. Merchant (2001)の問題点

sluicing 構造の時制節指定部にも主語が生起しなければ的確な解釈が得られない。

## b. Lasnik&amp;Park (2003)の問題点

解釈上、時制節指定部に主語が生起することを必要としない例を説明できない。

c. den Dikken *et al* (2000, 2007)の問題点

NPI 認可の再分析に関して、可能な否定節構造の定義が不明確である。

Merchant では Lasnik&Park の指摘からは時制節指定部に主語が生起する必要性があるだろうし、さらに den Dikken *et al* の分析からは主語が必ずしも生起する必要がない点も考慮に入れなければならない。(31a-b)に共通して言えることは EPP 仮定に重視しているためその概念自体破棄する必要があるだろうし、(31c)からはむしろ時制節ではなく否定節構造を精密化すべきだといえる。以下、2 節では Chomsky 2005a, 2006) の継承体系(inheritance system)を採用し(31a-b)を解決し、さらに NPI 再分析の可能性を踏まえた否定節継承の過程をこの体系に適用することで(31c)で掲げた問題点の解決を試みたい。

## 2. 継承体系(inheritance system)

## 2.1 継承体系分析-Chomsky (2005a, 2006)

1.4 節の(31)において指摘した問題点を全て解決に導くために Chomsky (2005a, 2006)の継承体系分析(inheritance system)を採用する。この分析の概要は(32)と(33)で示す通りである。

(32) a. C-T inheritance; [<sub>CP</sub> C  $\phi$  (per, num, gen) [<sub>TP</sub> e [<sub>T</sub> T [<sub>VP</sub> DP VP [<sub>VP</sub> [<sub>PP</sub> PP ]]]]]]

b. Movement (feature checking); [<sub>CP</sub> C [<sub>TP</sub> DP [<sub>T</sub> T  $\phi$  (per, num, gen) [<sub>VP</sub> DP VP [<sub>VP</sub> [<sub>PP</sub> PP ]]]]]]

(33) a. n-D inheritance; [<sub>NP</sub> n\*  $\phi$  (per, num, gen) [<sub>DP</sub> e [<sub>D</sub> D [<sub>NP</sub> NP [<sub>PP</sub> PP ]]]]]]

b. Movement (feature checking); [<sub>NP</sub> D-n\* [<sub>DP</sub> NP [<sub>D</sub> D  $\phi$  (per, num, gen) [<sub>NP</sub> NP [<sub>PP</sub> PP ]]]]]]

(32a)ではCの主要部位置から時制へ人称、性、数といった $\phi$ 素性が継承される。

この操作を動機付けとし、(32b)ではC端素性照合と一致素性照合のためのDP移動が駆動される。またこの体系をDP構造にも拡張したものが(33)であり、同様に(33a)では軽名詞句主要部(n\*)からDへ $\phi$ 素性(人称・性・数)が継承される。次にこの操作により(33b)では端素性照合のDの移動と一致素性照合のためのDP移動が駆動される。2.1.1節では(32)のCから時制への継承体系分析を、次に2.1.2では(33)の軽名詞句からDへの継承体系分析を概観する。

### 2.1.1 C-to-T inheritance

1.4節の(31a-b)で観察してきた分析の問題点はいかにして解決されるのだろうか。本節では主として Merchant (2001)、Lasnik&Park (2003)の問題点に関しては Chomsky (2005a, 2006)の提案する継承体系(inheritance system)に基づけば容易に解決できると主張する。そこで、MerchantとLasnik&Park(2003)の問題点の解決案として(34)を提示する。(31c)で掲げた den Dikken *et al* (2000, 2007)の問題点の解決案に関しては2.2.1節において後述する。)

#### (34) Merchant (2001)、Lasnik&Park (2003)問題の解決法

a. Cから時制への $\phi$ 素性継承により二重の移動(端素性照合のWH移動+一致素性照合移動)が駆動されるため、主語条件に違反しない。

b. (34a)の二重移動は素性照合を目的としEPPを仮定せずsluicing構造を派生できる。では(34a-b)を踏まえ、具体的に継承体系とはどのようなものか概観する。(35)をみよう。

(35) a. **Of which car** did they find the driver?

b. \***Of which car** did the driver cause a scandal? (Chomsky 2005a.13)

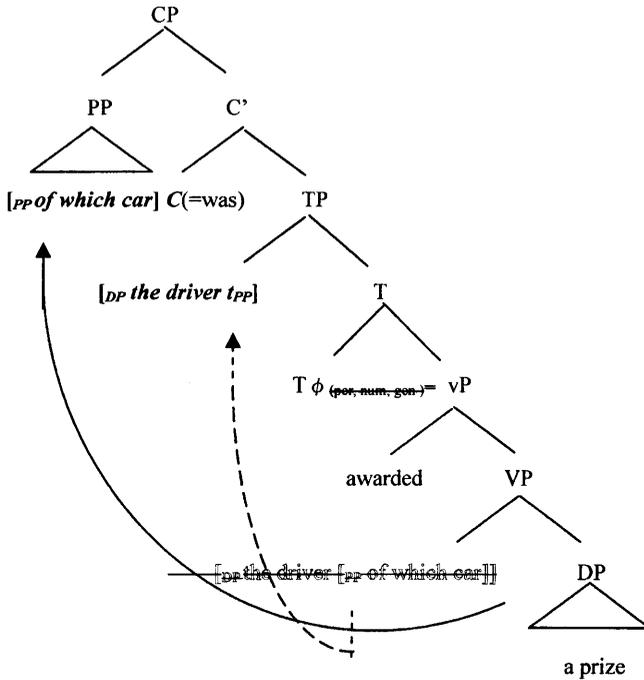
(35a)は目的語に位置する名詞句(the driver of which car)からの前置詞の抜き出しなので文法的であるが(35b)の名詞句は主語に位置するためそこからの抜き出しは主語条件に違反するものとして排除される。こうした事実を踏まえ、(36)とその派生構造(37)をみよう。

(36) **Of which car** was the driver awarded the prize?

(37) a. **C-T inheritance**;

[<sub>CP</sub> C  $\phi$  [<sub>per, num, gen</sub>] [<sub>TP</sub> e [<sub>T</sub> T [<sub>VP</sub> awarded [<sub>VP</sub> [<sub>DP</sub> the driver [<sub>PP</sub> of which car]]] [<sub>DP</sub> the prize ]]]]]

## b. Multiple Movement (feature checking)



(36)-(37) Chomsky 2005a.13)

(36)の名詞句に付加する前置詞句は主語に位置しており(35a)というよりむしろ(35b)に類するものとして分析され、非文法性が予測される。にもかかわらず(36)が文法的な理由として Chomsky は、(37a)に示すとおり C に内在する  $\phi$  素性(人称・性・数)が T へと継承されることにより端素性、一致素性照合のため二重の移動が(37b)のように同時に駆動されると主張している。<sup>6</sup> このように考えると名詞句は時制節指定部、前置詞は CP 指定部へ別々に移動するので前置詞は一度も時制節指定部の主語位置に生起することがないため(35b)の移動とは異なる。

### 2.1.2 n-to-D inheritance

次に den Dikken *et al*(2000, 2007)でみられた問題点を解決するため軽名詞句の構造を明確化し、さらにそれをNPI(any book など)認可、再分析を踏まえた継承体系に取り入れる。

#### (38) den Dikken *et al* (2000,2007)分析の解決案

a. C から時制への  $\phi$  素性継承を軽名詞句の否定節レベルまで拡張する。

b. 否定素性照合のため否定節にこそ構造的な要求(EPP)が満たされる必要がある。

(38a)を確認する手がかりを得るために継承体系の統一化として名詞類の構造にも拡張したChomsky (2006) の提案を概観しその可能性を検討する。<sup>7</sup>そこで(39a)のDP構造がいかんにして継承体系の基で派生されるか検証すべく、(40a-b)を提示しそのDP構造を派生する。

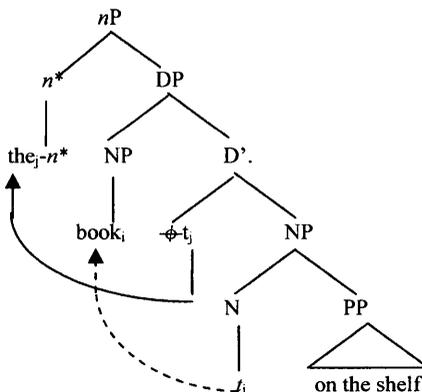
(39) a. You read [<sub>DP</sub> the book [<sub>PP</sub> on the shelf]].

b. \*What<sub>i</sub> did you read [<sub>DP</sub> the book [<sub>PP</sub> on t<sub>i</sub>]]

c. \*[On what]<sub>j</sub> did you read [<sub>DP</sub> the book [<sub>PP</sub> t<sub>j</sub>]]

(40) a. n-D inheritance; [<sub>n<sup>DP</sup></sub>  $\phi$  [<sub>DP</sub> [<sub>D'</sub> the [<sub>NP</sub> book [<sub>PP</sub> on the shelf ]]]]]

#### b. Multiple Movement (feature checking)



(Chomsky 2006.17-18)

Chomsky (2006)は、DP が名詞句よりも複雑な構造をしている証拠として軽名詞句(nP)の主要部のφ素性(人・性・数)が照合される必要があるためさらに目標となる名詞(book)が DP 指定部へと移動すると主張している。(40a)で軽名詞句からDPのDへと継承が行われる。さらに(40b)においてDPの指定部へと名詞が、それと同時に定冠詞(the)も軽名詞句の主要部へと二重の異動が導かれることになる。このようにして(39a)のように形成されたDP構造では(39b)の前置詞句の一部、(39c)では前置詞句全体の抜き出しが不可能になる。

このようにして Chomsky は D から軽名詞へのφ素性継承体系を提示し、前節で概観したCから時制への継承体系との並行性を主張し、更なる継承体系の統一化を図っている。

## 2.2 否定継承分析

前節では Chomsky (2005a, 2006)のCから時制への継承体系分析と軽名詞句からDへの継承体系分析を詳細に吟味し、これらの主張の妥当性を主張してきた。本節ではさらにNPI認可などが関係する際のsluicing構造を分析する必要がある。ゆえにこの体系に否定節から時制への継承過程(以下、否定継承)を仮定することでさらなる継承体系の一般化を導きたい。否定継承分析の概要として否定からD(41)、否定から時制への継承(42)を提示する。

(41) a. **Neg-D inheritance & n-D inheritance**;  $[_{nP} n^* \phi_{(per, num, gen)} [_{DPe} [D^* any \Phi_{Neg} [_{NP} NP ]]]]$

b. **Movement (feature checking)**;  $[_{nP} \Phi_{Neg} [_{n^* any-n^*} [_{DP NP} [D^* any \phi_{(per, num, gen)}] [_{NP} NP ]]]]$

(42) a. **Neg-T inheritance & C-T inheritance**;

$[_{CP} C \phi_{(per, num, gen)} [_{TP} e [_{T^*} ] [_{NegP} [_{Neg Neg} [_{vP DP VP} [VP [PP PP ]]]]]]]]$

b. **Multiple Movement (feature checking)**;

$[_{CP} C \phi_{(per, num, gen)} [_{TP} DP [_{T^*} T^* \phi_{(per, num, gen)}] [_{NegP} \Phi_{Neg} [_{Neg Neg} [_{vP DP VP} [VP [PP PP ]]]]]]]]$

(41a)ではこれまで概観してきたとおり軽名詞句主要部(n\*)から D へ  $\phi$  素性(人称、性、数)が継承され、端素性照合の D の移動と一致素性照合のための DP 移動が駆動され、同時に否定素性の伴う NPI 要素(any)が存在する場合は否定要素が照合されていないため D へ継承する形で軽名詞句の指定部へと移動する。次の段階として(42a)では従来どおりの C の主要部位置から時制へ人称、性、数といった  $\phi$  素性が継承されるが、さらに否定素性は未照合であるため時制へと継承する。次にこの操作を動機付けとし、(42b)では C 端素性照合と一致素性照合の DP 移動が、さらに否定素性照合のための否定素性の移動が同時に駆動される。そこで 2.2.1 節では(41)の軽名詞句から D への否定素性継承を含む否定継承体系分析継承体系分析を、次に 2.2.2 では(42)の C から時制継承を含む否定継承体系分析を、詳細に吟味しこれらの主張の妥当性を主張する。

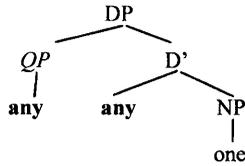
### 2.2.1 Neg-to-D inheritance

前節では C から時制への  $\phi$  素性継承を軽名詞句レベルまで拡張する手がかりを得たが、本節では主として(38a)の適用可能性を検証する。具体的には den Dikken *et al* (2000, 2007)分析の問題としてみられたようにどのような否定節構造で any wine が認可され、anything は不可能なのか、その否定節認可体系を明確化する。Merchant (2004)の(43)をみよう。

(43) What John didn't buy? — Any wine. (cf. —\*Anything.) (Merchant 2004.691)

(43)において any の持つ否定要素は D への継承後 nP 指定部へ移動するが、次の C-T 継承時は未照合のまま残留するため再分析できこのような体系は否定要素である NPI を伴う名詞句へと拡張できるだろうか。まずは Progovac (1994)の(44)、それと関連して Haegeman & Zanuttin (1991)の定義した否定基準(The Negative Criterion) (45)をみよう。

(44)

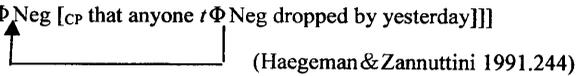


(Progovac 1994.68)

(45) a. 否定基準 (The Negative Criterion)

A negative operator ( $\Phi$ Neg) must be Spec-head configuration with a [+Neg] head.

b. I [<sub>NegP</sub> [<sub>Neg</sub> forget  $\Phi$ Neg [<sub>CP</sub> that anyone  $t$   $\Phi$ Neg dropped by yesterday]]]



(Haegeman &amp; Zanuttini 1991.244)

Progovac は NPI 要素を DP 構造の主要部に位置づけ、この要素の持つ否定素性( $\phi$  Neg)を消去されなければならない、そのための移動を行う。この操作は否定要素照合子と否定要素とは主要部 - 指定部位位置において消去されることを義務とする Haegeman & Zanuttini の提唱するように(45a)の否定基準に従うものであり、その証拠として(45b)では否定素性は非顕在的に主要部である否定動詞のもとへ移動し一致することからもわかる。このように否定素性は一度 CP 指定部を経由して移動することから本稿でも NPI は一度軽名詞句の指定部に移動してその後照合されるものと主張したい。

### 2.2.2 Neg-to-T inheritance

次に本節では(38b)の適用可能性を検証し、否定素性は軽名詞句指定部へ移動後いかなる過程を経て照合されるかを提示する。den Dikken, Meinunger & Wilder (2000)の(46)をみよう。

(46) a. [<sub>CP</sub> That anyone *would* leave the company] wasn't mentioned in the meeting.

b. \* [<sub>CP</sub> That anyone *will* leave the company] wasn't mentioned in the meeting.

(den Dikken, Meinunger &amp; Wilder 2000.10)

(46a)では that 節内部は主節の時制と一致しており文法的であるが(46b)では主節

の時制と一致しないため非文法的である。こうした事実は NPI が認可される、言い換えると否定解釈が生まれるのは必ず時制一致が義務的であることを示し、C から時制への継承体系が同時適用の移動を駆動したことと同様に、否定素性から時制への継承可能性も同様に適用されることを示唆している。(46a)の派生を(47a-b)にて提示する。

(47) a. **Neg-T inheritance & C-T inheritance;**

$[CP C \phi_{(per, num, gen)}] [TP e [T T \phi_{Neg} [VP mentioned [CP t_{\phi, Neg} [C that anyone would leave... ]]]]$ ...

b. **Multiple Movement;**

$[CP C \phi_{(per, num, gen)}] [TP [CP that anyone would leave the company] [T T was \phi_{(per, num, gen)}]]$

$[NegP [C that anyone would leave... ] \Phi_{Neg} [VP mentioned t_{CP} [PP in the meeting] ]]$ ...

c. **Feature checking & Deletion**

$[CP \bar{C} \phi_{(per, num, gen)}] [TP [CP that anyone would leave the company] [T T was \bar{\phi}_{(per, num, gen)}]]$

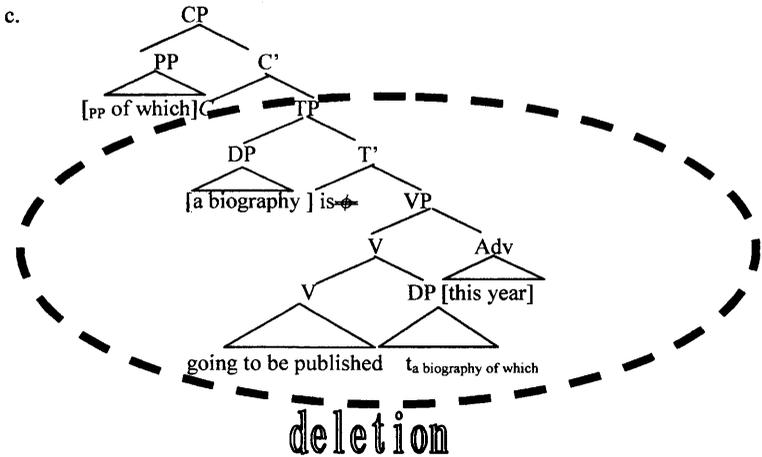
$\{ \bar{C}_{NegP} [C that anyone would leave... ] \Phi_{Neg} [VP mentioned t_{CP} [PP in the meeting] ] \}$

CP 指定部にある否定素性は否定節主要部へ移動しなければならない。そのため否定的意味と時制は同一でなくてはならないため(47a)のように否定素性から時制への継承が行われる。次に(47b)では(47a)の操作を動機付けとし、否定節指定へと主部(that 節)は移動し、否定節は否定基準に順ずる形で否定素性が照合される。さらにそれと同時に C から時制への継承も行われ、CP の指定部へと that 節も移動し、端素性が照合される。最後に(47c)においては  $\phi$  素性と否定素性のいずれも照合され、書き出しの段階では否定節の部分は照合が完了しているため削除され正しく(46a)が派生されることになる。

### 3. sluicing の継承体系分析

#### 3.1 sluicing と EPP; Case(1)&(2)





(49a)の sluicing 構造において、C から時制へと  $\phi$  素性(人・性・数)が継承される。次に (49b)はこの操作を動機付けに一致素性を照合するための DP(a biography)と端素性を照合するための前置詞(of which)の移動が同時に適用される過程を示す。最終的に (49c)で時制節以下が全て削除されるがこの過程は 1.1 節の(6)に示されているように指定部と主要部間での一致が生じたからで、全ての素性が削除されたことをも意味するのである。このような派生過程を経て sluicing 構造が形成されるが、この操作自体主語条件に抵触しないのは DP 全体が一度に時制節指定部へ移動するのではなく前置詞の部分は一度に CP 指定部へ移動するからであり、Merchant (2001)のように sluicing 構造には EPP を仮定しない、と付加的に定義する必要もない。

次に Lasnik&Park (2003)の提示した(50)における主語の持つ作用域の解釈的な特性を EPP を仮定せずに引きだすことができるか検証する。(50)の派生構造として(51a-e)を提示する。

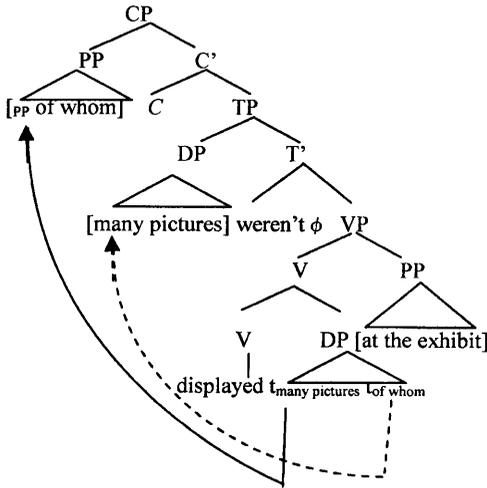
(50) Many pictures weren't displayed at the exhibit, but I don't know [PP of whom].

(Lasnik&Park 2003.656)

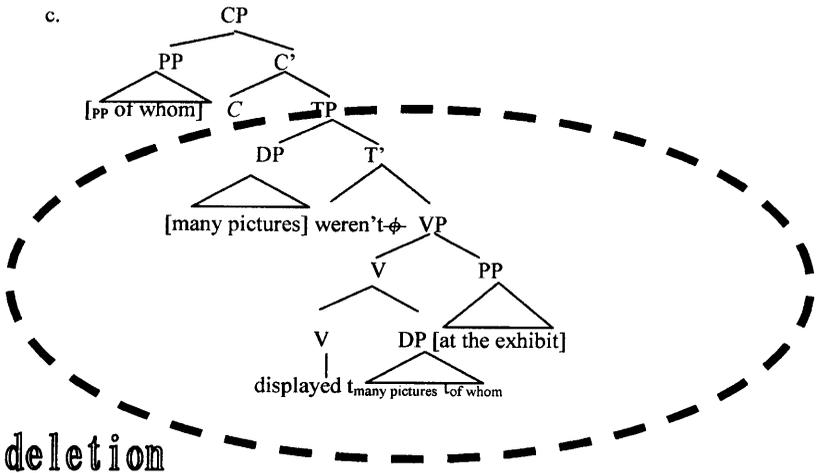
(51) a. T-C inheritance

[<sub>CP</sub> C  $\phi$  (<sub>per, gen, num</sub>) [<sub>TP</sub> [<sub>TP</sub> weren't displayed [<sub>DP</sub> many pictures [<sub>of whom</sub>]]] at the exhibit]]

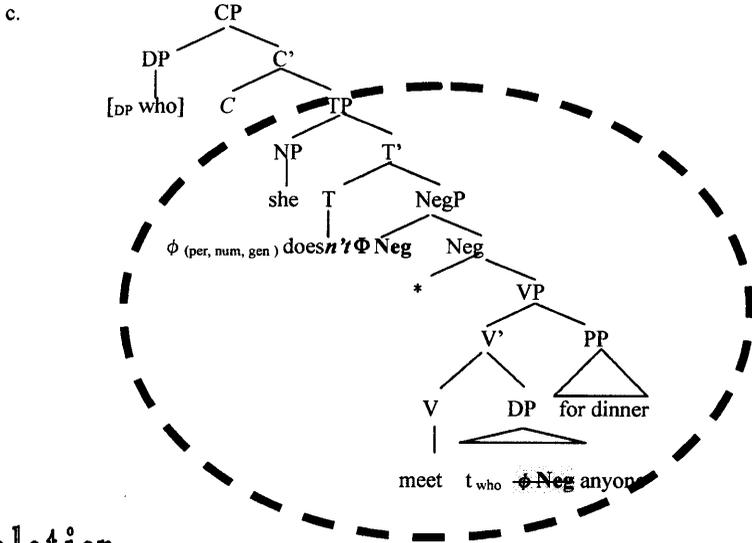
b. Multiple Movement



c.







# \*deletion

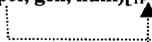
(52)ではなぜNPI認可が不可能か。その理由として(53a)でCから時制への $\phi$ 素性継承が行われ、(53b)ではWH句(who)が一致素性と端素性を照合するために同時に移動が適用される過程を示し、この過程自体は(49a-c)、(51a-d)と共通するが、(53c)からも明らかのようにこの場合時制との継承後照合されるべき anyone の否定素性が照合されずに残留し、結果的に非文法的な文として排除されるからである。<sup>8</sup>

さらに1.3節で概観したNPI再分析が不可能な(54)のsluicing構造の非文法性を説明できる。

(54) \*They never talk to any students. It's unclear[<sub>CP</sub> who [<sub>C</sub> C [<sub>TP</sub> ~~doesn't talk to any student~~]]]

(Chung, Ladusaw & McCloskey 1995:255)

(55) a. T-C inheritance:[<sub>CP</sub> C  $\phi$  (per, gen, num) [<sub>TP</sub> [<sub>T</sub> never [who talk to [any student  $\Phi$  Neg]]]]]



b. **Multiple Movement**;  $[_{CP}[_{DP} \text{who}] C[_{TP}[_{DP} \text{who}] [_{T\phi} \text{never} [\text{who} \text{ talk to} [\text{any student } \Phi_{Neg}]]]]]$

c. **\*Deletion**;  $[_{CP}[_{DP} \text{who}] C[_{TP}[_{DP} \text{who}] [_{T\phi} \text{never} [\text{who} \text{ talk to} [\text{any student } \Phi_{Neg}]]]]]$

(54)でNPI認可が不可能であるのは(55a)でT-C継承後、(55b)でWH句(who)は一致素性と端素性を照合するために同時に移動が適用される。次に(55c)で時制との継承後照合されるべき *anyone* の否定素性が照合されずに残留してしまうため非文法的なものとして排除される。このように継承体系を一致・端素性照合移動に適用すると否定素性の残留という単純な理由で説明できる。<sup>9</sup>

### 3.3 Case(4)-NPI再分析と擬分裂文

前節3.2では *sluicing* 構造上なぜNPI再分析が不可能かを検証してきたが、本節では(49)の擬分裂文ではなぜ外見上構成素統御されていないにもかかわらずNPIの再分析が可能かを検証する。まず、(56)のDP構造(*any of the painting equipment*)の派生過程を(57a-c)として提示する。

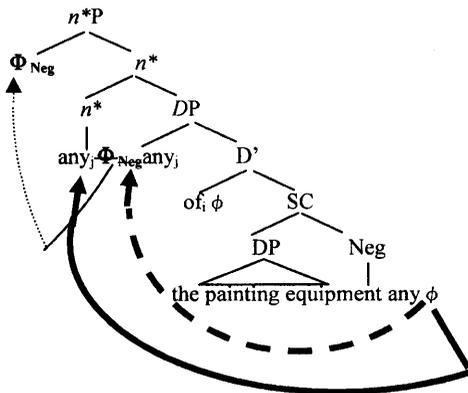
(56) What didn't work was *any* of the painting equipment.

(van Craenenbroeck & den Dikken 2007:658)

(57) a.  $[_{sc}[_{DP} \text{the painting equipment}] [_{NP} \text{any}]]]$

b. **n-D inheritance**;  $[_{n^*P} \phi [_{DP} e [_{D'} \phi [_{sc}[_{DP} \text{the painting equipment}] [_{NP} \text{any}]]]]]]]$

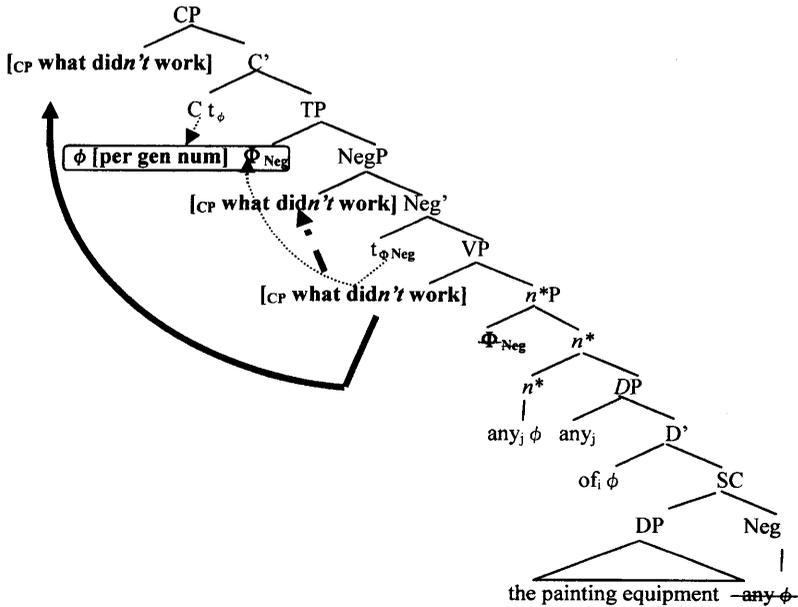
c. **Multiple Movement**



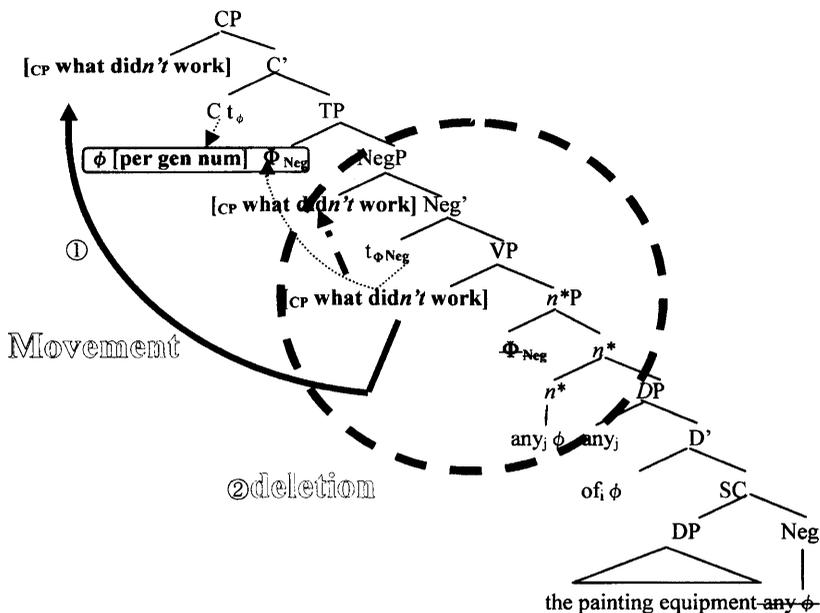
まず、名詞句(*any of the painting equipment*)の持つ否定素性がいかにして継承されるかであるが(57a)で既に形成されている DP と否定素性を伴う *any* とが併合し、小節構造を形成する。<sup>10</sup>次に(57b)で軽名詞句の  $\phi$  素性から D への継承が行われることを動機付けに DP 指定部へと *any* が移動する。さらにまだ *any* には否定素性が照合されていないため  $n^*P$  の端である指定部へと移動し、DP を形成する。だが、ここで注意すべき点として(53c)のままでは否定素性が残留しており、いずれ何らかの形で照合されなければならないことである。<sup>11</sup>この点を踏まえ、次にいかなる過程を経て否定素性が照合され、さらに次に行われる否定から時制への継承、さらに C から時制への継承により擬似分裂文が生成されるかを検証する。

以下、(57c)において形成された DP が動詞句と併合後、(58a-b)の派生過程が後続する。

(58)a Neg-to-T inheritance & C-to-T inheritance



## b. Multiple Movement &amp; deletion



(58a)において軽名詞句の指定部にある否定素性は否定節主要部へ移動しなければならない。そのため否定的意味と時制は同一でなくてはならないため否定から時制への継承が行われる。この操作を基に否定節指定へと主部である WH 表現 (what didn't work) は移動する。このようにして否定節は否定基準に順ずる形で否定素性が照合される。次に(58b)では同時期に C から時制への  $\phi$  素性継承も行われ、CP の指定部へと主部である WH 表現が移動する。こうして端素性と一致素性が照合後に、形成された二重の主語位置は、書き出しの段階では否定節の部分は照合が完了しているため削除される。以上の派生を経て(52)、(54)の sluicing 構造の場合とは異なり、(56)が的確に派生され、NPI 再分析も可能である。

#### 4. 継承体系の一般化

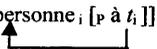
##### 4.1 Neg-to-p 継承体系—Moritz&Valois (1994)

本節では(59)で示すフランス語における前置詞句を分析した Moritz&Valois (1994) を概観し、本稿の分析に基づいた継承体系は前置詞から否定要素継承へと拡張できるかを検証する。

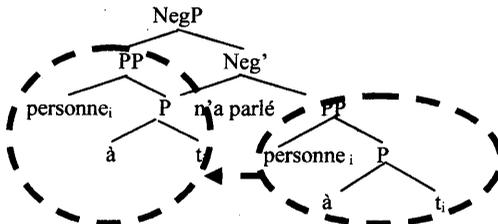
(59) Jules n'a parlé [PP à personne] 'Jules hasn't spoken to anybody'  
 Jules NEG-has spoken to nobody

(60) a. *Movement of personne to Spec PP and Specifier-head agreement*

Jules n'a parlé [PP personne<sub>i</sub> [P à t<sub>i</sub>]]



b. *Movement of PP to Spec NegP; Neg<sup>0</sup> is licensed*



((59)-(60) Moritz&Valois 1994. 690-691)

Moritz&Valois は(59)で外見上 NPI は c 統御されていないが否定の意味が得られることを前提に、非頭在的操作を含む(60a-b)の LF 構造を提示している。(60a)で前置詞句の構造には指定部があり、そこへ名詞が移動することにより指定部-主要部関係で一致する。<sup>12</sup> 次に(60b)において LF 構造では非頭在的に(60a)で既に形成した前置詞句全体が否定節の指定部に移動する。その結果否定基準に従う形で否定素性が照合され、結果的に否定的解釈が生まれるようになる。では本稿の継承体系分析への適用可能性を検証する。(61)の派生として(62a-c)が後続する。

(61) ?To any of his older friends, he {never/\*occasionally}shows his work.

(Kayne 2005:276)

(62) a. **p-to-P inheritance;**

$[_{p^*P} \phi [_{PP} e [_{P'} \text{to} [_{n^*P} \Phi_{Neg} \text{any of his older friends}]]]]$

b. **Neg-to-p inheritance;**

$[_{p^*P} \Phi_{Neg} [_{P'} \text{to} [_{PP} [_{n^*P} \Phi_{Neg} \text{any of his older friends}]] [_{P'} t_{to} t_{n^*P}]]]]$

c. **Neg-to-T inheritance, Top-to-T inheritance&Multiple movement**

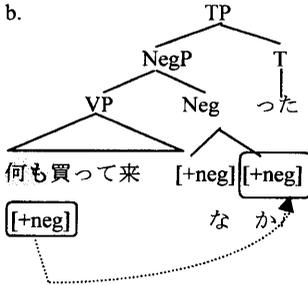
$[_{Top} [_{PP} \text{To any of his older friends}] [_{Top} \text{top}^0 [_{TP} \text{he} [_{NegP} \Phi_{Neg} \text{never} [_{VP} \text{shows his work } t_{VP}]]] \dots]$

(61)のNPI要素の認可が可能であるのは、(62a)において軽前置詞句主要部の $\phi$ 素性が前置詞(to)へと継承することを契機に、(62b)で軽名詞句(any of his older friends)と前置詞がさらに移動する。また同時に any が否定素性を含んでいるため軽名詞句指定部へ否定素性が移動する。だが、3.3節でみてきたようにまだこの素性は未照合である点に注意したい。最後に否定素性が時制へと継承し、(63b)で形成された軽前置詞句と否定素性とがそれぞれ移動する。だがこの時間題として考えられるのはこの移動は den Dikken(2006)が主張するように話題化移動であり、話題化素性の時制への継承を仮定せざるを得ない点である。<sup>13</sup>このように、話題化移動を端素性照合のための移動として考えることは有効であるが、果たしてWH移動のような $\phi$ 素性などのような素性が存在し、どのような過程を経て時制へ継承するのははっきりしない点も多く、検討する必要がある。

#### 4.2 Particle-to-Neg 継承体系—渡辺(2005)

さらに日本語不変化詞「も」を取り上げ、日本語の否定節形成上本稿で分析してきた継承体系がさらに不変化詞から否定素性への継承というかたちで拡張できるか検証する。

(63) a. Q 何を買ってきたの? A 何も(買って来なかった)。 (cf \*何も買って来た。)



(渡辺 2005.112)

渡辺 (2005)は(63a)をあげ「何も」以下の文は否定的な意味を内包したまま省略されていることに注目し、その要因は(63b)からも明らかのように否定節形成のために否定素性が非頭在的に否定節主要部へコピーされ、照合されるからだという。本稿の分析から考察すると日本語の不変化詞「も」には否定素性が備わっていて時制などへの継承過程を経て否定節を形成することになる。だがここで問題になるのはこの「も」という不変化詞自体は否定節指定部へ移動することなく照合が行われることである。そうすると、日本語の否定節形成には頭在的な移動が欠如していることになり非頭在的移動によっても否定節の構造的な要求が満たされることを認めざるを得ない。<sup>14</sup>だが、本稿の継承体系を適用する際、いかにして不変化詞から否定節への継承が行われるのか現段階では明確に仮定できるものではなく、暫定的結論として、頭在的 WH 移動が適用されない日本語においては、素性照合がその場で行われるパラメーター値の相違という点にのみ依存せざるを得ないものとなる。だがこの考えを認めると否定節継承体系は素性照合と構造的な要求によって動機付けられるという主張自体の説得性に欠けるものとなることが予測される。ゆえに不変化詞から否定素性への継承体系分析の適用可能性に関しては、今後さらに検討していくことが必要とされる。

## 5. 結語

本稿では主に sluicing 構造の適切な派生過程を考察してきたが、以下(64a-d)に要約される。

- (64) a. sluicing をめぐる先行研究として Merchant (2001)、Lasnik&Park (2003)、そして den Dikken *et al* (2000, 2007)を取り挙げたが、Merchant には削除文の時制節指定部にも主語が生起する必要性があること、Lasnik&Park の問題としては時制節の構造的要求として EPP を仮定してはいけない事実も存在すること、den Dikken *et al* の問題として NPI 認可の明確な否定節構造を仮定する必要があることを指摘した。
- b. 先行研究に見られる問題点の解決案として、Chomsky (2005a, 2006)の継承体系分析を採用することにより、C から時制への  $\phi$  素性の継承により一致素性照合の DP 移動と端素性照合の WH 移動との二重の移動が駆動されると主張することで主語条件に関係なく派生され、Merchant 問題点を解決できた。さらにこの操作は EPP を仮定せずに sluicing 構造を派生できるという点で Lasnik&Park の問題点をも解決できる。
- c. den Dikken *et al* の分析を解決するためにこの継承体系を軽名詞句における否定節レベルまで拡張し any の持つ否定要素は D への継承後軽名詞句指定部へ移動するが、次の C-T 継承時は未照合のまま残留するため再分析できないと主張した。この分析はさらに擬似分裂文、話題化移動など NPI 再分析の認可できない現象も網羅できた。
- d. フランス語の前置詞句の事実から、英語における前置詞から否定節への継承体系に関しては本稿での分析体系拡張の可能性を示唆するものとなった。だが本稿の分析上、話題化移動との関連性から、端素性照合のためどのような過程を経て時制へ継承するのかを考察の対象に入れなければならない、最終的な否定素性の照合に関してさらなる想定が必要であると結論付けた。また、日本語不変化詞「も」と sluicing 構造との相

関関係を検証した結果、不変化詞から否定節への継承体系分析の適用可能性自体いかなる過程が予測されるか不明確な点が多く、この不変化詞から否定要素継承体系を考察することそのものに対して検討の余地が残された。

### 参考文献

- Agüero-Bautista, Calixto. 2007. Diagnosing cyclicity in sluicing. *Linguistic Inquiry* 38.413-443.
- Boeckx, Cedric. 2007. *Understanding Minimalist Syntax: Lessons from Locality in Long Distance Dependencies*, Oxford: Blackwell.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. By Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2005a. On phases. Ms., MIT.
- Chomsky, Noam. 2005b. Three factors in the language design. *Linguistic Inquiry* 26:1-22.
- Chomsky, Noam. 2006. Approaching UG from below. Ms., MIT.
- Chung Sandra, William A. Ladusaw and James McCloskey. 1995. Sluicing and logical form. *Natural Language Semantics* 3: 239-282.
- Dikken, Mercurius den. 2006. *Relators and linkers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Dikken, Mercurius den, André Meinunger and Chris Wilder. 2000. Pseudo clefts and ellipsis. *Studia Linguistica* 54:41-89.
- Dikken, Mercurius den and Craenenbroeck Jeroen van. 2007. Ellipsis and EPP repair. *Linguistic Inquiry* 38:653-664.
- Epstein, Samuel David and T. Daniel Seely. 2006. *Derivation in minimalism*. Cambridge.
- Fox, Danny and Howard Lasnik. 2003. Successive cyclic movement and island repair: the difference between sluicing and VP ellipsis. *Linguistic Inquiry* 26:1-22.
- Guéron, Jacqueline. 1984. Topicalisation structures and constraints on coreference. *Lingua* 63. 139-174.
- Haegeman, Liliane and Raffaella Zanuttini. 1991. Negative head and the neg criterion. *The Linguistic Review* 8:233-251.
- Huang, C.-T. James. 1993. Reconstruction and the structure of VP: Some theoretical consequences. *Linguistic Inquiry* 24:103-138.
- Kayne, Richard S. 2005. *Movement and silence*. New York: Oxford University Press.
- Lasnik, Howard, and Myung-Kwan Park. 2003. The EPP and the subject condition under sluicing. *Linguistic Inquiry* 34: 649-660.

- Lasnik, Howard, and Saito Mamoru. 1992. *Move  $\alpha$ -Conditions on its applications and outputs*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis: Functional heads, licensing and identification*. Oxford: Oxford university press.
- McCloskey, James. 1996. On the scope of verb movement in Irish. *Natural Language and Linguistic theory* 14: 47-104.
- Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of silence: sluicing, islands and identity in ellipsis*. Oxford: Oxford university press.
- Merchant, Jason. 2004. Fragment and ellipsis. *Linguistic and philosophy* 27: 661-738.
- Moritz, Luc, and Daniel Valois. 1994. Pied piping and specifier-head agreement. *Linguistic Inquiry* 25: 667-707.
- Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicates*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moro, Andrea. 2000. *Dynamic antisymmetry*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Postal, Paul M. 1974. *On Raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Progovac, Ljiljana. 1994. *Negative and positive polarity*. Cambridge.
- Rizzi, Luigi. 1986. Null object in Italian and the theory of *pro*. *Linguistic Inquiry* 17: 501-557.
- Ross, John Robert. 1969. 'Guess who?' in Binnick et al. (eds.), *Proceedings of Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, University of Chicago, Chicago, III., pp. 252-286.
- Takano, Yuji. 1995. Predicate fronting and internal subjects. *Linguistic Inquiry* 26: 327-340.
- Takano, Yuji. 2003. How antisymmetric in Syntax? *Linguistic Inquiry* 34: 516-526.
- 渡辺明. 2005. 『ミニマリスト・プログラム序説』. 東京. 大修館書店.
- Williams, Edwin. 1977. Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.
- Williams, Edwin. 1978. Across-the-board rule application. *Linguistic Inquiry* 9: 31-43.

## 註

- <sup>1</sup> この省略の過程は Lobeck (1995) の (i) の過程に従う。省略が可能なのは、指定部の句と一致関係にある主要部の補部のみである。  
 (i) a. [<sub>XP</sub> YP [<sub>X</sub> X [<sub>ZP</sub> ZP ]]]    b. [<sub>XP</sub> YP [<sub>X</sub> X [<sub>ZP</sub> ZP ]]] (渡辺 2005: 109)  
 (i a) の指定部 YP と主要部 X と素性照合が完了し、次に (i b) では補部 ZP 以下は省略が可能であることを意味し、本稿でも一貫してこの省略過程を採用している。
- <sup>2</sup> den Dikken *et al* (2000, 2007) の体系では疑問文と返答のペアも疑似分裂構文も同一の話題化句構造により導かれるものと考えてられている点に注意したい。
- <sup>3</sup> Ross (1969) は (i) に関しても通常の文と sluicing 構造との関連性を比較している。  
 (i) 左枝条件 (The Left Branch Condition)

a. \*I know that he must be proud of it, I don't know how he must be proud of it.

b. \*I know that he must be proud of it, I don't know how. (Ross 1969. 276)

本稿で見たようにいずれの制約も sluicing 構造では完全な非文法性を示さないのに対して (i b)の左枝条件については非文法的である。この場合 Lasnik & Park (1993)の主張に沿うものが全体として本稿で見た制約との関連も含めて den Dikken *et al*(2000, 2007)の主張である sluicing 構造の曖昧性を支持するのか現段階では断定できない。

さらに通常の文と sluicing 構造との関連性に関して、Boeckx (2007)は(i)のセルボ・クロアチア語に関して興味深い観察をしている。

(i) Serbo-Croatian

Ivan i Marko ne znaju ...

Ivan and Marko neg know who what

a. ko je šta kupid

who is what bought

b. \*šta je ko kupid

Ivan and Marko don't know who bought what

(Boeckx 2007.141)

(i a)でみられる ko(who)が šta(what)より高い位置に生起しなければならないという優位性効果は(i b)の間接疑問文においては修復することが不可能である。次に(ii)をみよう。

(ii) A: Somebody bought something, but

B: a. Ivan i Marko ne znaju ko šta

Ivan and Marko neg know who what

b. \*Ivan i Marko ne znaju šta ko

Ivan and Marko neg know who what

(Boeckx 2007.141)

(ii B - b)が不可能であることから sluicing 文脈において ko(who)が šta(what)より高い位置に生起しなければならない。よって sluicing 構造でも優位性効果は修復不可能であることから本稿でみた Ross の観察と異なり、通常の時制節が形成された場合との共通点も見受けられることがわかる。Boeckx の英語前置詞句に関する考察に関しては註 12 を参照のこと。

<sup>5</sup>動詞 forget には否定的意味が含まれていて NPI(any)が適切に認可されていると考えるのが普通であるが以下の Progovac (1994)の例も考えられる。

(i) \*Mary forgot anything.

(Progovac 1994.123)

本稿では(i)の非文法性に関して、that 節の場合と異なり否定素性が端へと移動することが可能であるが格表示が先になされてしまうからであると考え。

<sup>6</sup>Chomsky (2005a)における同一表現の移動とは(i)(ii)の移動操作も含まれる。

(i) a. Agree;C [ T [ who [ v\* [ see John ] ] ] ]

b. who<sub>i</sub> [ C [ who<sub>j</sub> [ T [ who<sub>k</sub> [ v\* [ see John ] ] ] ] ] ]

c. who<sub>i</sub> [ C [ who<sub>j</sub> [ T [ ~~who<sub>k</sub>~~ [ v\* [ see John ] ] ] ] ] ] (=Who saw John?)

(ii) a. Agree;C [ T [ who [ v arrive ] ] ]

b. who<sub>i</sub> [ C [ who<sub>j</sub> [ T [ [ v arrive who<sub>k</sub> ] ] ] ] ] ]

c. who<sub>i</sub> [ C [ ~~who<sub>j</sub>~~ [ T [ [ v arrive ~~who<sub>k</sub>~~ ] ] ] ] ] ] (=Who arrive?) ((i)-(ii) Chomsky 2005a.15)

(i)で v\*は名詞類(John)と一致する。その後 C-T 継承を経て探査針である T は目標である who を引き上げる。その結果一致素性、端素性それぞれが照合され T と一致した who のコピーは消去される。この操作は非対格構文(ii)の派生も同様である。この考えは本稿でも擬似分裂文の派生で否定節指定部に位置する WH 表現が削除される過程と共通する。

7 Chomsky (2006)では使役動詞が軽動詞素性を継承する体系を提案しさらなる継承体系の統一をはかっている。

(i) a. [<sub>VP</sub> φ [CauseP\* [Cause CAUSE[<sub>VP</sub> V NP ]]]]

b. [<sub>VP</sub> φ [CauseP\* [<sub>VP</sub> V NP ] [Cause CAUSE[<sub>VP</sub> V NP ]]]]

c. [<sub>VP</sub> CAUSE [CauseP\* [<sub>VP</sub> V NP ] [Cause [<sub>VP</sub> V NP ]]]]

(Chomsky 2006.18)

軽動詞句の持つ φ は CauseP の主要部にまで継承を受け、素性照合のため動詞句全体が移動する。最終的にはこの動詞は使役の意味を得るがこのような考えは本稿の否定節に対する考えと符合するものである。またこのような考えは Postal(1974)、あるいは Lasnik & Saito(1992)らによる Raising to Object の議論に対して肯定視できるものとも捉えられよう。

8 Sluicing 構造ではない通常の(i)はなぜ的確か考察したい。

(i) They can't figure out who she doesn't meet anyone for dinner.

(ii) a. [<sub>CP</sub> who [<sub>TP</sub> she doesn't meet anyone for dinner]]

b. ... [<sub>VP</sub> figure out . [<sub>CP</sub> who [<sub>TP</sub> she doesn't meet anyone for dinner]]]

(i)はボトムアップ方式で従属節の時制句が形成され、その時点で NPI が認可される。その後 who が併合され、さらに選択特性として主節動詞(figure out)が併合される、といった派生な過程(ii a-b)を経て形成される。よって本稿での sluicing 構造派生と異なる点は WH 句移動などといった概念は考慮しない点が大い。

9 本稿の分析は(i a-d)の非文法性を排除することが可能である。

(i) a. \* [Buy any record]<sub>i</sub> she didn't <sub>t<sub>i</sub></sub>.

b. \* Anything<sub>i</sub> has nobody done <sub>t<sub>i</sub></sub>.

c. \* [Whose story about anything]<sub>i</sub> does John not like?

d. \* It's anyone's picture<sub>i</sub> that no one likes <sub>t<sub>i</sub></sub>.

(Takano 2003.521)

(i a-d)は全て下線部における名詞表現(she, nobody, John, no one)が介在するため全ての一致素性は照合されている。本稿の分析は全て端素性と一致素性は同時に満たされなければならないのでその後(i a)の動詞句、(i b)、(i d)の名詞句、(i c)の WH 表現は一致素性が満たされず結果的に本稿において NPI の sluicing 構造で見られる否定素性が残留する。

10 小節構造から動的対称性(dynamic antisymmetry)を破る、言い換えると PF 上の破綻を防ぐため移動現象を動機付ける方法としては Moro(1997,2000)を参照のこと。

11 2.1 からも明らかなように Chomsky (2006)は軽名詞句と軽動詞との並行性を主張しているものの軽名詞句には指定部位置がない。だが本稿では軽名詞句の指定部位置を設定するが、軽動詞との並行性を深めるばかりでなくまだ未照合の否定素性の逃げ道を設けるためである。

12 このような前置詞句にも指定部が存在するという主張はフランス語に限ったものではない。Boeckx (2007)は英語前置詞構造を(i)のように定義し前置詞残留現象を説明している。

(i) [<sub>PP</sub> P° [<sub>PP</sub> P°]]

(ii) a. Peter was talking with someone, but I don't know (with) who.

b. Who was talking with?

(iii) a. Anna hat mit jemandem gesprochen, aber ich weiß nicht, (mit) wen.

Anna has with someone spoken, but I know not, \*(with) who.

b. \*Wem hat sie mit gesprochen?

((i) - (iii) Boeckx 2007.141)

WH 移動のもと、英語(ii)に前置詞残留は許されるのに対しドイツ語(iii)では許容されない。この要因はドイツ語では従来どおり前置詞の補語に名詞を伴う PP 構造であるため更なる抜き出しは許されないが、英語には複雑な軽前置詞句構造(i)があるため軽名詞句の指定部(端)への抜き出しが許されるため更なる移動も可能になるといえる。

<sup>13</sup>本稿での(61)(以下、(i))として再掲)を空の述部(pro predicate)を用いた分析に関しては den Dikken (2006)が示唆的である。

(i) ?To any of his older friends, he {never/\*occasionally} shows his work.

(ii) [<sub>Top</sub> [<sub>PP</sub> To any of his older friends]]<sub>Top</sub> top<sup>0</sup> [<sub>IP</sub> [<sub>PP</sub> Null *pro*-PREDICATE]

[ he I<sup>0</sup> never [<sub>VP</sub> t<sub>P</sub> [<sub>VP</sub> shows [<sub>RP</sub> his work [<sub>R</sub> t<sub>P</sub> ]]]]...

(i)のNPI要素の認可が可能であるのは、時制句指定部に前置詞句の空述部が生起し、話題化句指定部に生起する顕在的な前置詞句とある種の連鎖を形成しているからである。

<sup>14</sup>否定節にはEPPが存在するという主張に関しては Haegeman & Zanuttini (1991)の西フランダース語を用いた分析を概観する。

(i) West Flemish

a. ...da Valère niemand nie kent.

that Valère nobody not know

“that Valère doesn’t know anybody.”

b. ...da Valère nie kent niemand.

that Valère not know nobody

“that Valère doesn’t know nobody.”

...

(ii) da Valère [<sub>NegP</sub> niemand<sub>i</sub> (+<sub>Neg</sub>) [<sub>Neg</sub> nie [<sub>Neg</sub>  $\phi_{Neg}$  [<sub>VP</sub> kent t<sub>i</sub>]]]]

((i)-(ii) Haegeman & Zanuttini 1991:235)

Haegeman & Zanuttini (1991)は否定的解釈か二重否定の解釈の相違は否定節形成の移動が導かれるか否かに依存していると主張している。構造(ii)のように目的語(niemand)が否定節指定部へ移動することで否定節のEPPが満たされ(ii a)の否定解釈が可能になり、移動がない場合は二重否定(i b)として解釈される。さらに彼らは英語では非顕在的な移動のもと否定基準が満たされることを主張している。さらに渡辺(2005)の主張を踏まえると日本語もEPP形成の顕在的移動は不必要になる。

(\*本稿は第23回甲南英文学会(2007年6月30日)での口頭発表草稿に加筆修正したものである。)



## 甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
  2. 機関誌『甲南英文学』の発行
  3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
    - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
    - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
    - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
  2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
  3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
  3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
  5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
  7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
  8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間5,000円、学生会員については2,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

## 『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
  - イ. 和文：ワードプロセッサ（40字×20行）でA4判15枚程度
  - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65ストローク×25行、ダブルスペース）でA4判20枚程度
4. 書式上の注意
  - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
  - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
  - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の箇所では原語名を書くことを原則とする。
  - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook, 6th ed.* (New York: MLA, 2003) 『MLA 英語論文の手引き』第6版、北星堂、2005年に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet (Linguistic Inquiry vol. 24)* に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は11月30日とする。

## 甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を A4 判 400 字詰め原稿用紙 3 枚（英文の場合は、A4 判タイプ用紙ダブルスペースで 2 枚）程度にまとめて、3 部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

---

甲 南 英 文 学

No. 22

平成 19 年 10 月 20 日 印刷

— 非 売 品 —

平成 19 年 10 月 31 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付

---